川柳の雑誌

麻生路郎★編輯

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十二年九月一日發行　第十四卷第九號（毎月一回一日發行）

NO.IX VOL.XIV

温泉へ！

南紀樂園
景觀日本一
白濱・湯崎
（難波より毎日直通運轉）

紀州
泉質日本一
龍神
（南部よりバス）

療養向
椿
（紀伊椿よりバス）

靈泉
湯峰
（朝來よりバス）

療養向
川湯
（朝來よりバス）

療養向
湯川
（湯川よりバス）

紀の松島
勝浦
（勝浦下車）

小川
（尾崎下車）

錦溪
（三日市町下車）

紀見峠
（紀見峠下車）

鑛泉

根來
（岩出よりバス）

炭酸鑛泉
天見
（天見下車）

南海電車

推奨　林榴博士學醫
監査　瀬片博士學醫

ワダカルシューム錠

安産のために

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる姙娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシュームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護榮養に任じ、惡阻期を安全に經過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますからお産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豐富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髪、齒牙の惡化を防止し、乳兒も隨つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀬醫學博士述「安産のために」進呈

代時ムーユシルカてし設建を

茲に二十年、幾十萬の姙産婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシューム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀬博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は弊店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
「ワダカルシューム錠」

大阪道修町　和田卯助商店

川柳雜誌　九月號目次

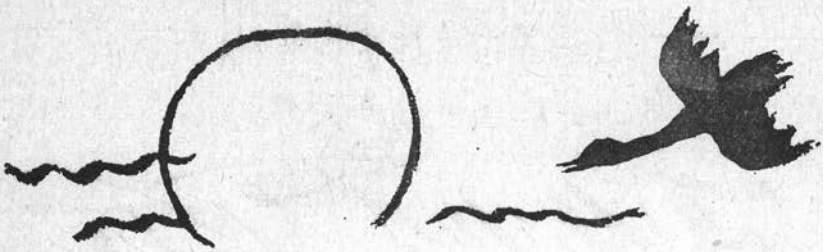
題字・路郎筆

文苑

武玉川三編研究（九）……梅本秋の屋・森東魚……（一六）
誤記・錯覺の訂正係（柳誌柳書より）……蛭子省二……（三一）

諸・家・雜・筆

墓……安川久留美……（五）
夕立と小蟹……濱田久米雄……（五）
川柳飜譯英美詩……阿部佐保蘭……（六）
U軍曹……石田沐天……（七）
桃太郎序曲……石曾根民郎……（八）
一寸變つてる……西いわを……（八）
へそくり帖……姫田夕鐘……（九）
街に住めば……高橋かほる……（九）
既成品は不可（川柳指導講座）……塚越正光……（三一）



川・協・の・頁……川柳人協會…(五〇)

柳人素描……(六)後藤青兒君…(七)小西落丁君…(八)弘津慶一君

漫畫セクション　一大事……小川武…(四九)

雁の嘆き……北幹夫

川柳横町……不死鳥…(三三)

創作

七人集……(四)

川柳塔……霞乃、かほる、新水、鮎美、夕鐘、水車、豆秋、變人、いわを白峰、青兒、古弗、ライト、柳秀、九天、久米雄、曉童、椋影…(二六)

近作柳樽……麻生路郎選…(一〇)

日本名所名物川柳（京都の巻）……山川紫明選……朝賀大鱗選…(二〇)

一路集　忘物……高須啞三味選…(三四)

仲人……朝田新水選…(三四)

各地柳壇……(三六)

柳界展望……(二六)　社關係の人々……(四四)

編輯縱横……(四三)　川・雜・案・内……(四五)

川柳雜誌

第十四卷　第九號

七人集

ドレス着てやつぱり容子して走り　かほる

極道もいざ出征となる笑ひ　新水

女あんまの日傘に白ろき　鮎美

千圓といふ石燈籠に鍵がない　夕鐘

通ひ道お茶子ねずみのやうに行き　水車

九官の晝寢アサヒ軒ビヤホール　豆秋

可愛がつてやればインキなどこぼし　變人

隨筆　墓

安川久留美

毎年一度の御墓參りといふものも、この四五年來は大抵家内の者に代參させて、先祖にすまぬが御無沙汰してゐたのだが今年は歩いて行つてもさう遠くないので母と一しよに盂蘭盆の墓參りをすることにした。二人のあとを追ふてお寺まで來たのは私の末ッ子である。彼は墓參りすることの理由を解せないが、母と私に伴れだつてくれればお菓子にありつけると思つたからである。夜も八時に近い頃だつたから墓所は靜かでもう坊さんが墓經を詠んでゐるのもあつた。母が買つて來た花束を奉り線香に火をつけてらうそくにも點けたが、それが白い〳〵洋燭だつたので一寸氣分を殺いだ。やはり和製の方がいゝ。方丈がわざ〳〵出て來て經を詠んで下さつたので、泉下の六つの靈も嘸喜んだことであらう。珠數こそなけれ合掌禮拜して歸つたが、母は私と一しよに墓參りしたのは十何年振りであつたから、心が清々したやうな言葉を漏らしてゐた。私はいつも形式を嫌つてゐる者だから、一年に一度來る墓所も單に精神的な意味で、涼味をとりに來る位に心得てゐるのだ。

家から近いからこの後せめて父の命日だけでも毎月一回墓の字をよみに來やうと思つてゐる去年あたりから切籠の字を書かされたので祖父母と父と兄と先妻の六つの戒名は暗記出來るやうになつた。斯うして切籠までに習字のお稽古をするやうになれば人間もだん〳〵老ひて行くのであらう。

五十の坂までに四五年はある私は「墓」といふものを死のシンボルと思はず、精神統一をする一個の石としてゐるにすぎない。（七月十六日）

夕立と小蟹

濱田久米雄

小蟹が二匹。樋の口から折柄の驟雨で迸り出る水の流れに向つて登つて來る。水の流れは庭のトマトの根を勢よく走つて横の泥田に注いでゐる。泥田は又何處かで家の前のどぶを兼ねた流れと結ぶ。僕は沛然と降る夕立の爽快味を滿喫しながら、この二匹の小動物の行働を見つめてゐた。

樋の口まで來たらもうその先は行けぬことは必然。だが勇敢なその意氣、何處までも行けるとこまで頑張るといふ努力、内心一種の同情と敬意を拂ふことしばし、遂に來る可き時は來た樋の口を去ること二尺餘りの地點で昂然と背伸びして前方を注視する斥候役の蟹。一秒—二秒—三秒、前進不能と見て取つた一匹は、他の一匹を促してサッサと元來た流れに添つて下つて行つた。意圖遂に成らず、水を

泡を吹き上げながら寸時にして何處かへ姿を隱してしまつた。蟹も非常時、その足の速さには侮れぬものがある。

夏雲の悪戯、それから起きた小蟹の善闘、人間樣に敎へる何ものかがあつたやうだ。

川柳飜譯英美詩

阿部左保蘭

これは人から聞いた話であるが、今を時めく近衛首相が或日弟秀麿公との茶話にこんな意味のことを話されたさうである。

「僕は即興的に英語を漢語に飜譯してみたんだが、面白いだらう」と云つて示されたのが「英美、詩」

「して兄さんその英語は」と云はれて即座に

「ABCさ、Aは英に通じ、美はBに通じ、Cは詩に通ず。昔から云ふぢやないか、音が通ずれば、意も亦通ず、」と。呵々大笑されたそうであるが、さすが非常時内閣を背負つてたたれビクともせぬ所、英雄閑日月あり古人の言又宜なる哉である

この青年宰相の機智にあやかるべく、尻馬に乘つて出たのが僕であると前口上はその位にして早速本文にとりかゝらせて戴くことにする。

英 はAに通ずるとは先刻の近衛さんのお話の通りである。そこでAから思ひ出したのが、A. Miyamori 敎授である。宮森さんと云へば、宮森さんの事を番傘の八月雜誌上の座談會で雞牛子さんが何か云つて居られましたれ、即ち「宮森麻太郎氏が俳句と和歌をフランス語に飜譯されたんですが、その人が川柳を飜譯するといふ、その研究會を東京でやつたそうですが……」といふ。この話を今日宮森さんに話したら

「オホウ、わしも偉くなつたものだなあ、フランス文學の大家になつた譯だな。批評家の十人が中八人までこの調子だからやりきれん」といふ樣な事を云つて呵々大笑して居られました

私が近江砂人さん宛の消息の中に「もう少し眞劍に話するなら

するで研究してからにして欲しい」意味の事を書いてゐたのはこの話を宮森さんにする前のことでした。路郎先生から大分前のおたよりの一節に「五七五の飜譯お讀み下すつたそうで御好評嬉しく思ひます。その當時、三味線草が路郎氏でなければやれぬ原稿とチョーチンを持つてくれた以外餘り褒めてもなかつたのです。柳界は無關心な人が多いです」。いふやうな條りがあつたやうに覺えてゐるが、その三味線草の御大雞牛子先生だけに一言述べさせて戴いた次第である。

美 で思ひ出したのですがいつも乍ら Ban gasa の表紙は美しい。殊に今月の表紙はお世辭でなく親しみがもてる。九十九里濱へ祖母達と行つてゐる去年の暮生れたばかりの年昭の顏が急に見たくなつた。表紙の事はそれ位にしてさつきの座談會の續きに移る。水府氏が雞牛氏の說に對して「わかり易い句をもつて行くよりしやうがないでせう」と云つて居られるのは月並だが無難な御說である。宮森敎授のお話に依ると英語に適する句は千に一句でせうれとの事でした。英譯する事よりも句を

探す方が骨折れるとも云つて居られた。とにかく外人が見ても大體解る句と云ふのが第一の要件らしいです。

詩 詩はCに通ずると云つてみたものゝ、これには一寸弱つた。がそこはさすがに川柳人今日宮森さんから聽いた許りのローマ字問題を思ひ出したのである。即ち田中博士の唱へられるローマ字改正問題であつて Chi を無くして ti にしたいといふのである。處が宮森先生の云はれるには ti と Chi では外人の發音が違ふからそれは駄目だといふんださうである。夢の切れつ端見たいになつたけれどローマ字問題はこの位にして。川柳詩人麻生路郎先生のことに觸れたい。先生は御存じの如く大正の始め頃からこの川柳飜譯のことに關心をもたれてゐたそうである。さすが嘗て世界戰爭の際外國電報の檢閲係をやつて居られた丈にこの方面への著目も早かつたものと思ふ。私が今度この川柳飜譯のことを始めて先生に色々御指導をうけてゐる間に知つた事であるが、蔑乃夫人が時々英詩川柳を作り川柳を英譯したりしてゐられる由、先生のお話によると、彼の女は散文より詩が樂だと云ふ人間で古くよりそれを生涯の仕事にしてゐられる由、僕は急に頼もしくなつて本會の贊助員になつて戴いたのである。最近おからだがお弱いやうに拜承しますが、柳界の爲御自愛を祈つてやまない次第であります。尚最後に又「晩涼に語る」の「川柳の飜譯は疑問だ」に觸るのですが、當夜この問題に關し沈默を守られてゐた紋太、溪花坊兩先生のお説が是非拜聽したいものと思つてゐるそれから東魚さんが「譯者自身が本當に川柳の解る人でなければ出來ぬ」と云つて居られるのは本當で、その點周魚先生をしてこんなに深く川柳を理解して居られることは知りませんでしたと感服せしめた宮森教授を私達の會が顧問に戴いてゐるのは柳界の爲悦びに堪へない次第である。ラストに雞牛子先生の言「研究會が出來て宮森さんを煩はして川柳が外國に紹介されると確に一つの外國進出には違ひあいふ事ばりません」はさすがに我が意を得たりで、柳界の特ダネに異色ある編輯ぶりを見せて居られる三味線草の御大だけあると深く敬意を表してひき下る事にする。（一九三七、八、一〇）

U軍曹

石田沐天

敵すでに呑んだ氣持の赤蹠

このたびは私達の身邊から次々と公用に應じて行つた。

麻生路郎編著・柴舟漫畫

累卵の遊び

四六版一六〇頁・序文・漫畫三十二葉

川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摺り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である

定價 壹圓
特價 八拾錢
送費 九錢

大阪市西成區玉出本通三ノ三六
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二

私はかうした公務のあるごとに今は何所にゐるか知らないU軍曹のことが思ひ出されてならない。それはもう十餘年前の此頃であつた。

東北は最上川の流域に送電用の大鐵塔が山を越え谷を渡り平野を横切つてうねり〳〵の列をして建つていた時である。

『なあもし、高い所へのぼるのも、もう考へもんだすわな、登つて行くごとに子供の笑顔が浮んで來てな……』と、これが高い所が商賣の鳶職の日燒した髭だらけのコワイみたいな男の言葉とは受取れなかつた。

この男をどうした經路で雇つたのか忘れてしまつたが呑ん平で博徒の如き兄のために彼は日々喘いでゐるのであつた。

『こんな季に戰爭でもあつたら……』としみ〴〵と嘆つのである。彼れは四國の或る聯隊の機銃に屬してゐる未だ豫備の軍曹で帶勤者であつた。

生れると同時に母を失くした彼れの子は旅から旅の知る邊の手に預けられてゐた。彼れの故郷に親とてなく因緣の兄と共に假寢を續けて行く鳶の人生である。酒の呑めぬ軍曹はただ兄のために生命を削つてゐるかの樣に思へた。

みちのくの峰々から秋が忍びよる頃U軍曹の鳶の一團は高野山に索道工事のために秋を別つ季が來た。それは此の地方特有の凄い時雨の去來する黃昏れを街の方へ驛のある方へとその一團は續いて行つた。U軍曹の派手な印半纏が初秋の風にはたはたと靡いてゐるのが夕闇の中にくつきりと浮いてゐた。

桃太郎序曲（下）

石曾根民郎

五大噺や浦島太郎や養老の瀧などの昔噺をとりまぜて戲作したものは黃表紙に多いらしい。「桃太郎發端話說」は桃太郎が生れる以前を綴つたものだし、「山入桃太郎」「桃太郎物語」「昔々噺問屋」などあると聞く中井履軒戲編の「昔々春秋」は春秋左氏傳の体で戲作されたものであるが、これらは大抵桃太郎が中心であるのはいみじき一致とする。

× ×

正岡子規の桃太郎を詠じた短歌がある。

× ×

日本の兒を眠らせる桃太郎　寒々

鬼ケ島へ行つたところで子は眠り　蛙郎

桃太郎などといへばそのクラシカルカラーを笑はれるかも知れない。私は過去の夢を追つてしみ〴〵となる事が好きである。短い生命のなかで、幼かつた頃の幻影にすがりながら、たとへようもないエレージをくちずさもうとする。ちよこんと顏を出した人生のみちの神秘に撫ぜられつゝも。

手元にある資料を斷片的に書き拔いてみた。まだ殘つてゐるものもあるが、後日に改めて筆を執りたい特に桃太郎の作者、始元など。蒐集の途上ある不徹底さを恥づるばかりである。

一寸變つてゐる

西　いわを

『一寸變つてゐれ』此の言葉は無意識の中によく使はれる常套語のやうである。殊に婦人には其の例が多過ぎる。

某百貨店で陶器展があつた。陶器展と云つても賣出しに相違

ない。若い二人連の妻君らしいのが、一枚の皿を手にしてすぐ『此の皿一寸變つてるね』とやつた。夫君はさして氣にもとめずウンと云つたきり二人共買はずに向ふへ行つてしまつた。僕は大して變つた皿とも思はなかつた。(七、一九記)

へそくり帳(二)

姫田夕鐘

單線の夜汽車がゴトリ〳〵と進んでゐる箱には僕の外に一人しか居ない淋しい晩であつた。やがて次の驛に着いたと同時にあわたゞしく四十がらみの男が這入つて來たが僕ともう一人を見守つてゐたが發車ベルと共に列車は靜かに辷りかけてゐた。その男は突然窓に寄りかゝり大きな聲で驛長さんよ——これで此處へ乘つてもえゝのかへと赤切符を見せた。驗長はにこりともせず二三度大きく頷いてゐた

× ×

阿波航路の汽船が客が滿載して阿波へ着いた。連絡の汽車へとホームへ急いだが六輛の箱に乘りきれない。豫備の三輛程を繋いだがまだ乘客はぞく〳〵と詰めかげる發車の時刻は五分程過ぎてゐるがまだ驛長は出さない——十分やがて十三分も過ぎた頃やうやく全部が乘込だと見ると驛長の手は高く上げられて發車した。人々はまあ乘れて良かつたと云ふ表情であつた。次の驛も次の驛も何の事故もなく進んで一時間も過ぎた頃には十三分の延發も元通り取り戻してゐた。僕は思つた。驛長の臨機の處置に人々は喜んだが不幸にして事故が勃發した場合、知つて延發さした申譯は何とするであらうか、など……

いゝとかわるいとか云ふ事はほんとにセロハン一枚の差であることを今頃痛感させられた。

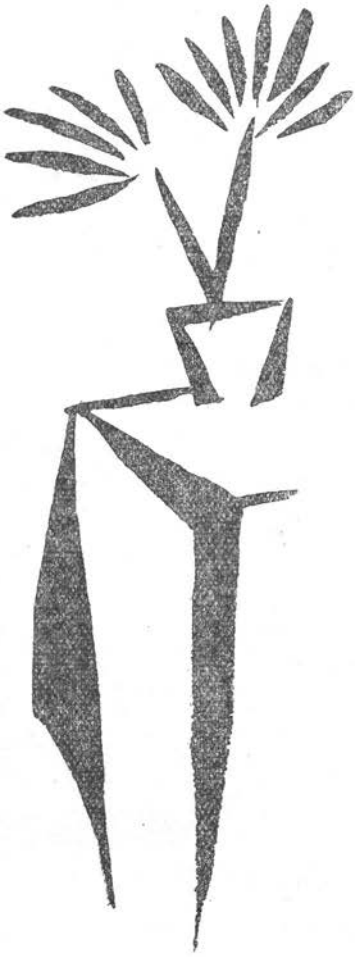
街に住めば

高橋かほる

大黒神社前の電車道で青物を積んだ車が押せども曳けども一寸も先きへ行かぬ所へ留つた市電の運轉手が『これでじいわり押して上げまへよう』と電車の墮力で青物の車は動きましたので青物の車を曳いてた人はおじきしながら『エライスンマヘンおうきに』すると運轉手の曰く『これで押したらボロクソや』

近作柳樽

麻生路郎選



蚊張に風せめて大きな夢を見ん　今治　谷心府

小使に私用の愚痴を聞かされる　同

俠氣といふのは損をする事か　同

魚市場お經となへて賣る如し　同

鳳仙花線香花火へほの白し　同

迂濶にも言葉の裏を後で知り　同

ギターの音ぼろん〳〵と夏の窓　同

出征の汽車の向ふの雲の峯　同

燈火管制我關せずの螢籠　大阪　富本無煙

水槽に値段浮かせて錦魚ゐる　同

爪びきに居るとわかつた悉皆屋　同

構内の紙屑飛ばす特急車　同

竿竹屋聲だけで行く袋露路　同

轉寢へ吹くしきのしの霧がとび　同

出征のトラック日の丸盛り上る　同

俎板へ一家みな寄る丸西瓜　兵庫縣　田邊由布

胎動のうれしいなかの蓄音機　同
五月雨へ牛と蛙とにんげんと　同
二筋のタオルなまめくお湯の宿　同
繼人を乘せてオールのマメが出來　同
繼の花あしこにも咲くボートの灯　同
媾曳のきれいな砂を只いぢり　同
蚊を叩く男の脛に毛が足らず　大阪　古寺謙南坊
ひざの子も同じほどのむソーダ水　同
辻占の親は表で子を背負ひ　同
クーポンを蓄めた丁稚の定休日　同
のぞかれて女給財布をさし上る　同
大掃除隣りに負けぬ精を出し　同
海近くなつて電車のみんな立ち　同
袋棚仕舞忘れたものが出る　名古屋　星野兄兄
アドバルン匙もつ人の眼が動き　同
口實を考へて來たバットの火　同

友の出征を送る

汽車の窓しつかりやれと手を離し　同
女戸主借家でないを噂され　同
吊つてある服から拂ふ氷代　大阪　柳大門
別嬪の不作な晩も面白し　同
反目の夫婦どちらも肩が凝り　同
通勤の驛出征の靴で立ち　同
締めて出る戸を振り向かぬ赤襷　同
あきんどは奉仕をするに廣告す　今治　長野文庫
妬む目を背にうけ功勞賞を受く　同
堰切つた如く献金雪崩うつ　同
本屋では信用厚き默り者　同
悔狀型にはまつた字を並べ　同
文化燒客の無い間を讀む雜誌　大阪　松枝靜波
媾曳の曇つてほしい良い月夜　同
太鼓燒夏は氷に早がわり　同
荒壁のままで契約濟の札　同
戰爭の話義憤を感ずる夜　同

新市街蛙の聲も減つてゆき　尼崎　酒井　斗風

變電所横で敷地はまだ賣れず　同

轉職の友は受付係なり　同

ポンポンに曳れて歸へる淡路島　同

特價品買つて滿足さうな顏　同

ワンピース・バンドが横でねぢれてる　大阪　正本　水客

お悔みを云うに扇子をパチつかせ　同

生暖い風で電車は發車する　同

食堂で千人針も飯にする　同

のみこんだ欠伸主任の目と出合ひ　同

宿題へ父も手傳ふ夏休み　奈良縣　嶋田　翠峯

父親のきげんの悪るい蠅叩き　同

鰯屋のこんどの聲を見失ひ　同

男裝へ坊主枕が並べられ　同

おとなしく待つてゐろよと父は征き　大阪市　石田　沐天

バンザイの聲が終つて淋しまれ　同

勇士爆笑駒の蹄も音高し　同

庭下駄で虫のすだくを消してゆく　同

心して呑めとは君も他人樣　大阪　岩橋　岩石

お百姓さんが目に這入らない良い景色　同

生駒より青田の夏を嬉しがり　同

豆團扇心齋橋の汗をかき　同

夏の街女の胸に泳ぐもの　今治　月原　宵明

安產を田植の尻へ云ふてくる　同

猫の戀柘榴の花が一つ落ち　同

電話孃と爭ひ一層暑くなり　同

双葉山負けてもラヂオ沸騰し　大阪　馬淵　龍城

ビョ〳〵〳〵座數へ上る雛が二羽　同

禁煙と定めて一本から崩れ　同

バスぐん〳〵スピードを出す夜の街　同

變屈といはれて熱い風呂が好き　尼崎　酒井美知夫

境遇を忘れかけたり戎橋　同

京阪神防空演習

風呂しきをかぶせて暗い膳につき　同

この次は俺の番なり小旗ふる　同

東京とも大阪とも言ふ描き眉毛　今治　渡邊芳岸

タクシーにひらひこまれた描き眉毛　同

たれの日か精進にする描き眉毛　同

書留の來る名が違ふ描き眉毛　同

借金もなし柏手がしみ渡る　尼崎　山田南濃路

漫才をうまく受け賣る樂天家　同

子のパヂヤマ親のパヂヤマと同じ柄　同

キヤンピング拔け出て汽笛一つ聞く　大阪府　黑川紫香

密豆を食べる一人は和服の娘　同

臨終と知らず友達遊びに來　同

葱植えて漸く畑らしくなり　長野縣　林幹

忍從を事務精勵の名で稱へ　同

わが時計信じて汽車に乘り後れ　同

別莊で暮し令嬢夏に負け　名古屋　稻垣正穗

夏休み動物園へ行っただけ　同

洗面器水遊びした色になり　同

抱へ來た桔梗かるかや秋の風　長野縣　金井有爲郎

妹の新盆

よりかゝる柱の冷が身をつたふ　同

法律におびやかされて小商人　同

仕事服汚れたまゝで友と會ひ　兵庫縣　加茂柳扇

教科書のしみに先生の顏も出る　同

歡聲をあげてカフエーを出る若さ　同

隣からも北支のニュースよくはいり　朝鮮　弘津慶一

汗臭い體も今日の樂しさよ　同

暑さがビールへビールへと走らせる　同

定期券こんな曇りも海へ行く　大阪　北川春巢

出征をします頭で禮に來る　同

待ち人の來るおみくぢを大事がり　同

屋根替の左官に世帶覗かれる　丸亀　馬場浪二

剃刀に鼻の眞下を殘される　同

大阪の橋がきれいな夏祭　同

まだ雨だ雨だと麻雀屋で寢てしまひ　大阪　泉流葉

悪口を云ふ程仲の良い同志　同
親切に貸して横取る大資本　同
腕まくらしたは暑さをしのぐため　下關　多田市他樓
子は藁に眠つて麥を刈つて行き　同
晩酌の背吹いてゐる煽風機　同
頬杖は娘としての樂な形　今治　石手　河鹿
約束を破る受話器の口を貸し　同
侠客はのつぴきならぬ破目となり　大阪　金丸　隼人
退社して庭の草木に眼がとまり　同
宛名だけ兄に頼んだ假名の文　同　野本　呑水
蚊のかぶれ撫でゝお通夜は朝となり　同
嘘にしてしまへば妻の怒りだし　愛媛縣　岡田　浮草
惚れ込んだ弱身に金を使はされ　同
酒の力で鬱憤を晴らし　高松　楊柳　夢
大酒家は大方米の儉約家　同
不精髭醉ふだけでいゝ灯をあさり　長野縣　高峰　柳兒
山羊連れて農夫ひとゝきの憩ひ　同

うたぐられもう辯解もせぬ女　大阪　丸尾　潮花
暮れ切つて千人針の娘は歸り　同
冷藏庫欲しがるまゝに盆も過ぎ　大阪府　大阪　形水
母の手から俺へ抱つこの手を出した　同
寢おくれて子の辨當はパンにする　大阪　岡田　玻瑠
戰線の夫は如何に子の寢息　同
野球好き子の壘審に汗をふき　廣島　野田　昇玉
新綠の丘の日傘に陽はまとも　同
味噌汁を褒めて昨夜の酒を詫び　同　得能　紫浪
夕涼み西瓜が濟んで一人去り　同
赤ン坊からママ白粉に親ませ　長野縣　佐二木千隈
デパートになれて買はずに氣安く出　同
育兒院屋根の小鳩が淋しそう　廣島　澤井　香月
モガの靴並んだ横を蛙飛ぶ　同
孫と晝寢の祖母と寢る猫　大阪　山本　葉光
諒解を求める事に手まねする　同
潔癖は國際愛への緣を切り　布哇　前山　北海

長唄の名取りで二世日本趣味　同　米谷松太樓

煙草の火それから續く國自慢　大阪　今井　菊路

觀世流女中は眠い眼をこすり　同　岡山　和夫

この海も太平洋につらなりぬ　大阪府　大島　石艸

香はしき松の香ひに深呼吸　同　國分　紫花

女の手紙とて姉から來るばかり　石川縣　山崎帆加夫

TRADE・MARKのありそうな蟹の甲羅　同　北山　紫柳

リュクサック下せば瓜がぬれてくる　同　松本　文太

赤とんぼ僕には父も母もある　同　櫻井　不水

子を憶ふ千人針の街へ立ち　廣島　福岡葉留路

この札で集金袋輕くなり　今治　綾田　三郎

婦人科醫は御主人の名を先に聞き　島根縣　川柳亭凡愚

戰爭が亦有るそうな廣い支那　青島　正木　琴舟

雜記帖眞正面から笑はれる　大阪府　宮岡　公子

此人を待たす男の顏見たい　大阪　難波南海男

前借りへ會計眼鏡越じろり　高松　松永　廉夫

賣られ行く西瓜は汽車の窓に暮れ　大阪　竹内美津枝

子に世辭が上手で店が好くはやり　同　岡山　和夫

萬歳の歡呼兵士の固い口　布施　國分　紫花

惡友にまた惡友のあるを知り　名古屋　奥富　天作

きいた聲裸のままで飛んで來る　廣島　北山　紫柳

出征の雄圖の中に母の顏　大阪府　櫻井　不水

やるせない無言火鉢へ文字をかく　下關　藤井　徒歩

弟の押の強さよ多幸たれ　神戸

♣

心府、無煙、由布、濂南坊兄兄の諸君が進出した。中でも由布君の「胎動の」の句には若さが脈打つてゐる。濂南坊君の「ひざの子も」や「のぞかれて」は輕く見つけてゐる。

大門君の句では「吊つてあるが面白い。時局を詠んだ句は可成り澤山あつたが君の「締めて出る」に及ぶ句は無かつた。翠峯君の「男裝へ」は何んの技巧もなくズバズバと云つてしまつたところに面白味がある。南濃路君の「子のパジヤマ」は輕い穿ちだ。本號の佳吟と云へば殆んどすべてが輕い穿ちであるが有爲郎君の「抱へ來た」は如何にも秋らしい感懷が出てゐてうれしい。總評をすれば本號は佳吟に乏しかつた。猛暑と時局の忙しさとの板挟みで苦吟されたらしい方が多かつた。一層の精進を切望する。（路）

武玉川三編研究（九）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(142)

蓬生に左まへなる風の神

秋の屋＝流行感冒は、眞先に都會を襲ひ、邊鄙には流行せぬものなれば、蓬生の宿などでは、風の神には、左前即ち運が悪いと云ふのであらう。

東魚＝田舍ぢや風の神も商賣にならない。

省二＝風の神は疲せ衰へた、見るかげもない姿のものと想像されて居る。―無論蓬生の村へも、やつてくる事はあるので、鉦太皷、酸漿提灯で、はやし立てゝ村から厄病神拂ひを行つたのを、風神送りと稱して居る。

(143)

晝顔も溜息をつく小名木澤

秋の屋＝小名木澤は、東京深川小名木川の舊名で、此邊は盛夏の炎天にも、休息する處が無い故、晝顔の花も溜息をつく、と云ふのであると思ふ。

東魚＝日影といふものがない、野のさま。「溜息をつく」は、ちと危い表現である。

省二＝川通りであるからであらう。小名木川の五本松は有名。「或人云ふ、舊名女木三谷（なたぎさや）なりと、古き江戸の圖に、うなぎ澤とも書けり、江戸雀小名木川に作る。又此地に鍋匠の家ある故に俗間あざなして鍋屋堀とよべり」で、金砂子下卷の『小名木澤なびく煙の鐵くさし』と解釋し得らる。

(144)

双六に片手のきかぬ五月雨

秋の屋＝何故に片手が利かぬ歟。不可解。

東 魚＝前句にうたゝ寢でもしてゐるやうな、氣分があるとすれば、臂枕の片手が、しびれたと考へる事は出來るかも知れぬ。

省 二＝句面では手がゝりがない。双六と五月雨の連鎖はつけられぬ事もないが。

(145) **生なから何にあかれて常念佛**

秋の屋＝主に倦かれた歟。傾城に倦かれた歟、念佛堂で日夕鉦を打鳴らしてゐるやうでは、全く生甲斐のない身である。

東 魚＝「あかれて」は、人から倦かれると云ふよりは、何に倦なされて、(未だ人世は樂しかるべき年だのに)と云ふ樣にもとれると思ふ。

省 二＝常念佛堂で鉦を叩いて居るのは、何人にあかれての仕業なるか。「生ながら」は强張の辭。

(146) **燈籠の火を細〳〵と梅寒し**

秋の屋＝庭前の石燈籠などに、細々と火の點る處に、梅花の咲出た光景で、其の寒氣が身に迫る。

東 魚＝燈籠の穴が、三日月形などだと、尙更寒い感じがあらう。

省 二＝燈籠の灯は冷靜氣分を覺ゆるものだ。細々とぽつて梅の影をみるのでは、寒氣を催すものとなる。

(147) **青いもの着るかるい疱瘡**

秋の屋＝疱瘡患者は、赤い衣を着る慣習であるが、假痘であるから、それを着ずに、青色の物を着るのである。

東 魚＝殊更に赤に反對に、青いものを着るといふ意味合ひではなく、赤でなくとも、何んでも構はずに着るのを赤に對する對色の青を持つてきたのが、句の綾なのであらう。

省 二＝然り。輕い疱瘡だから、赤い物を着てゐない意味。

(148) **新造のわつかな願をかけなかし**

東 魚＝活字本には「顏」とあるが、厚本は「願」とよめる。一寸した願をかけてみたりしたが、そのまゝ等閑にしてしまふ處が、流石に子供つぽい新造らしい處である。

省 二＝願を掛けた通りになつても、僅かな願だから、御禮詣も碌々せずに、掛けはなしなのだ。

秋の屋＝顏よりも願の方が、句意が判かるやうであるけれ共、猶且、霞を隔てゝ花を見るやうだ。

(149) **强飯の譯も知らずに目出度日**

秋の屋＝强飯は多く祝賀に用ひられるが、江戸時代には葬式にも用ひられた。

東 魚＝娘の初の來潮の祝は、普通の小豆飯なのだらう

が、強飯も用ひたのではないかしらん。さすれば家の母と娘の外の連中が、何にも知らずに、と解する事が出來るが如何であらう。

省　二＝　この強飯が小豆飯なれば、お說通りで類句に、『兄は譯知らずに祝ふ小豆飯』がある。必ずしも小豆飯のみでなく、赤飯も用ひたのではなからうか。「浮世風呂」には赤飯と書いてコハメシと讀ませて居る。「萩原隨筆」に「京師にては吉事に白強飯を用ひ、凶事に赤飯を用る事民間の習慣なり。江戸は上にて四月より八月迄白強飯、九月より三月迄赤飯を御用なりとみゆると有り」。「松屋筆記」に「今世赤飯をこはめしといふは誤也、三議一統上、法曹門に赤飯といふは小豆の添たるをいふ也、しろきは剛飯也と見ゆ」などあるけれ共、結局初花祝に落着させて可ならむ。此句「金砂子」にも出て居る。―（佛式用は白強飯で、もつさう強飯と稱した）。

秋の屋＝　強飯と赤飯に就いて、少し述べたい事がある。江戸の末期に於ては、強飯（こはめし）と稱するのは、糯米を蒸したもので、それに小豆を加へたのを、赤飯（せきはん）といひ、葬式の時の強飯には、雁喰（がんくひ）といふ黑豆を入れた。亦、粳米に小豆を加へて焚いたのを、小豆飯または赤の飯と稱へて、赤飯（せきはん）とは呼ばなかつた。子守唄の「赤のまんまにとゝ添へて云々」とあるのが夫れである。葬式の時の強飯は、死者が五十歲以下であると黑豆を入れ、以上であると小豆を入れたのである。

省　二＝　守貞漫稿をみても、秋の屋さんのお話の如く記してある。

(150)　かい敷の笹に手を引稻ひかり

省　二＝　食べ物を盛る器へ敷いた木の葉で、搔敷紙といひ、檜葉、南天葉等を用ひた。稻光に一寸驚いて、手を引くといふのには、笹の葉が應しい。

秋の屋＝　今日でも鮓には、笹の葉を搔敷にする。

東　魚＝　かい敷になさんと笹を取りに出て、稻光に驚いて、切らんとする手を止めた場合なのであらうか。或は、盛られた食物をとらんとして途端に稻光に驚いたのか。

(151)　入知惠に口の揃はぬ戀衣

省　二＝　戀事に對し入智慧では、兎角に齟齬を生じ易く口が揃はぬものである。

秋の屋＝「戀衣」の衣は、全く贅疣である。

東　魚＝　贅語ではあるが、前句に何か着るとか、衣に關係ある味意合ひがあつての事であらう。でなくば「入智慧も戀には口の揃かね」とか、合ひかねて、とか云へると思ふ

(152)　念者に似合ふ大つゝミ打

省　二＝　大皷打が女性に好かれぬといふ句は、度々解釋してきた。さすれば念者に似合ふ所以も亦判斷し得る。大

皷は男性的に感ぜられる。

秋の屋＝『大皷打といふものには、好男子が無いやうに思はれるが、念者ならば凛々しい男であらう。

東　魚＝大皷は打つ態度からして、もの〳〵しい。

(153)　**文盲な駕は寢て行かゝミ山**

省　二＝鏡山いざ立よりてみてゆかん、年經ぬる身は老いやしぬると。—歌などに無關心の者は、立寄りもせず、駕籠にゆられて眠むツて通る。（鏡山は近江國に在り、北麓が昔の鏡の宿で、旅人は立寄つて旅の憂さや疲れを慰めたものだ）。

秋の屋＝鏡の宿には遊女がゐたから、此處には文盲も寢て行つたかも知れぬ。

東　魚＝寢てゐれば、誠に無事なことである。

(154)　**須磨とあかしは曠な知行所**

省　二＝萬石以下の武士の領地を知行所と稱した。須磨明石といふ名所を取込むならば、曠な知行所に違ひはない『知行に持て見たい吉原』（武●五）

秋の屋＝旗下の領地をも、やはり知行所と稱した。播州明石は、松平氏の領地で祿高六萬石である。

東　魚＝日本三景などなら、尚更の事だらう。輕い味がこの句の良いところである。

省　二＝（後記）「普通には萬石以下の領地を指して知行と云ひしが如し、即ち旗本御家人並に諸藩士は多く其領地を知行所といひしも、大名にありては領地と唱へたり、但し全然稱せざるにあらざりしことは、當代記慶長十六年八月二十一日の條云々」（國史大辭典）

前號（武玉川）正誤表

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
一八	上	六	いふが	いふ事が
一八	上	十二	針の	針の錢
一九	上	七		
一九	上	十二	蜀	蜀
二〇	下	二〇	藥を教	藥教『を』なし
二一	上	六	充分	十分

象潟節子　（平井節子）八月十九日午後九時他界致しました三月少康川柳誌に投句をいたしましたが又臥せつて失ひました以來半年。子供も手が掛らなくなりましたし今度こそ快くなつたら句會にも出さして下さいねと云つたのも無駄な心遣ひとなりました生前の御柳交を厚く御禮申上げます。

平井與三郎

日本名所名物川柳

（京都の巻）

（十三）五色豆

山川紫明選
朝賀大鱗畫

お茶の出の加減を譽める五色豆　二山

五色豆舞妓赤から喰べて行き　紫期

子の好きな色だけ減つた五色豆　柳童

五色豆舞妓の袂ころげ出る　藤四郎

京土産振れば音する五色豆　葉光

座布團の下にかくれた五色豆　木履

團體旗俺も〳〵と五色豆　信次

五色豆へ集る地方の女學生　いの助

五色豆本家は知らず驛で買ひ　其奥

五色豆舞妓の口を小さく見　案山子

珠數持つた手で買つてゐぬ五色豆　美和夫

網棚に搖られて戻る五色豆　紫香

京極で五色豆買ふ一人旅　陽出男

五色豆男の掴む音に成り　水客

五色豆旅の鞄に音を立て　同

五色豆提げて發車が迫るなり　双光

五色豆子のポケットを一つ逃げ　同

五色豆叱られた手をまだ伸し　柳次

天然鰻の味

日本料理の粋

竹葉亭

本亭　大阪市瓦町（大手橋西詰）

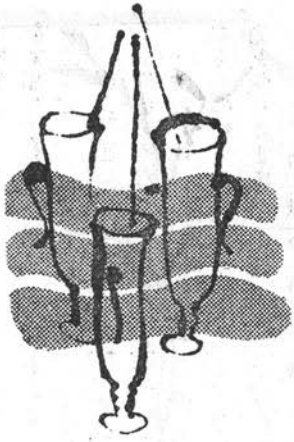
南店　同湊町驛前（阪急ビル）御座敷と食堂

北店　同堂島濱通（渡邊橋北詰）御座敷と食堂

梅田阪急百貨店　七階和食堂

戎橋三笠屋　二階和食堂

日本綿業會館　地下食堂



既製品は不可

川柳指導講座「枕」と「戀」

塚越正光

諸君の期待に反いて一回休んだことはまことに濟まないと思つてゐるが、事情は前號の消息欄で傳へて呉れたやうな身邊の變化によるもので諒とされたい。

さて今度の課題は「枕」だが、諸君はこの枕といふ語感からエロチツクなものを感じないだらうか、エロチツクとまでは感じなくとも艶めかしさは感じることと思ふ、それは枕が一つの存在では、何の變哲もない一箇の寢具に過ぎないが、二つになるとそんな簡單なものではなくなるからである。これは私が今アパートの假寓で空氣枕一つの佗しさを味ひつゝあるからの感じではない。

私は空氣枕といつたがこの集句にそれはなかつたばかりではなく、塵枕と手枕の二句だけが枕の名稱を詠み込んでゐるのみである。他は課題を忠實に詠み込んでゐるが、そこに飛躍（句の）はない、況して近頃流行の陶枕などは誰一人材料にしてゐないのは、案外視野が狹いからなのではなからうか、取材にあたつてもつと廣く見渡すことは決して無駄ではないと思ふ。限られた課題の場合それがどんな思考力を涵養するに役立つかに、やがて氣づかれるであらう。

この集句は數が少なかつた故か、それぞれの觀方を示してゐるが、誰でも氣のつく言はそこらにころがつてゐる材料ばかりで、既製品といつてもいい、斯うした特種な場合なので一句、一句とりあげられるが、課題吟ならば、沒の憂き目を見ることは言ふまでもないことである。

妾宅の留守を塗枕がころげ

この作家としては、妾宅のじだらくさを塗枕がころげてゐることで描寫したのはせい一杯であらう　事實またそれが効果をあげてはゐるが、留守にまでさせなくともと思ふだが本欄の作家としてここまで苦心したことを尊重して、敢て添削などはしてないことにしよう、このいきで今後の發展を期したい。（句主　松江　都之介君）

里歸り枕へ惜しい髷の出來

枕へ惜しい髷の出來は里歸りばかりではない、たとへそれが現實だとしても、この出來上つた句が動くから、散漫な感じを與へるだけである。いつそ髷の出來だけをいたはる寢しなの女心をでも詠んだ方が、眞實味がこもるのではなからうか、それに里歸りと髷の出來といふ條件もあまりに既製品なので……といふことは諸君にもつと句作興味を喚起して貰いたいといふ意味である……何とかしたいと思ふが

髪の出來やつと枕へ乘せは乘せ

では作家のそれとはあまりに距離がありすぎるし

塗枕いたわつて寢る髷の出來

でもこの作家に快心の笑をもらさせる譯には行かないが、先を急ぐことにしよう。（句主　長野縣　幹君）

一日の働き振りは枕知る

作家は何か幻想的なものを求めてゐるに違ひないが、終日行動を共にするのではない枕が働き振りを知ることは異論がないではないが、枕につけた頭の中でけふ一日のそれを思ひ廻らしたのでと考へることも出來る。

一日の働き振りを枕知る

とてにをはだけを正してよいとしよう。この場合下口を知る枕とすることも考へられるが枕知るでこそ作家の幻想的な思念が表現されるのである。（句主　高松　柳夢君）

宿直の留守を枕は並べて見

宿直で今夜は歸らない夫の枕を並べて見るといふ妻の心意氣は句面から汲みとることが出來るが

宿直の留守を枕へ話かけ

と淋しさをまぎらはす彼女の心持を汲んでやることの方が一歩前へ出た姿である。（句主　兵庫　淳二郎君）

蟬の聲辭書まで枕にされてゐる

うたたねと書物はあらゆる角度から詠まれてゐる。だから枕にされるだけでは既製品になつて仕舞ふ、尤も作家として辭書までに發見があると信じてゐるのであらうが

蟬の聲辭書は枕に丁度いい

のではあるまいか、辭書といふ概念が部厚いものなので、そんなに積重ねることもあるまいと思ふ。（句主　ハルピンぎん君）

する事がなくて枕を取り出し

私の句にこれと同巧異曲な「喋りくたびれて枕をふくら

まし」といふのがあるが、この句の下五は下五にするためにこんな言葉を探し出した感じを與へる、そこで

する事がなくて枕を取りに立ち

なら下五のための下五といふ感じから逃げることが出來る

（句主　大阪　隼人君）

蚊帳の中皆んな枕をよそに寢て

枕をよそにするのは蚊帳の中だけに限らない、いつでもよい句として

どの子もどの子も枕をよそに寢る

と子の寢像へ焦點を合はせたらどんなものかと思ふ。

（句主　大阪　石艸君）

手枕にお酒は毒なものと知る

中七以下の叙法はどこかでぶつかつてゐるやうな氣がするが、それは敢て問はないことにして、この作家が手枕をキャッチしたことに敬意を拂つて置かう、このこつを失はないで進んで貰ひたい。（句主　大阪　香林坊君）

前回の集句が八句、今度の「戀」が六句だんだん心細くなつて來る。卒業證書を渡した覺にはないが、もう本欄の作家ではないと自分免許で他流試合に出かけて吳れたのなら心强いし、この講師によつて得るところはないと見限つたのなら、私としては大變喜びに堪えない、何故なら私如きからものを聽く要のない人達が輩出して吳れる柳境であることを望む私なのだから、この指導講座といふおこがましい名に氣恥かしささへ感じてゐる今日このごろの私にとつては、本誌の投句家諸君がよりよき成長をとげて仕舞つたら、どんなに小ざつぱりすることであらうと思つてゐる。だが今日まで見て來た工合では却々左樣は行き相もないことを慨かはしく思つてゐる。

ところで今度の課題「戀」だが、川柳作家を志すほどの人々が、戀したとか、戀されたとかの經驗はとも角として戀といふものへの認識は有つてゐるものと思ふが、さて諸君はどんな戀を、見たか、聞いたか摑んだか、得たか、失つたか一句一句に訊ねてみよう。

片われが檢屍の前へぬつと出る

戀の終末を捉えたこの作家は、そこに醜惡なものを感じたのであらう、それを叙すにぬつとなる語句をもつて來たのだが、それは効果を殺いだ結果となつて氣の毒である、第一茲まで行つては課題から外づれること甚しでその點だけを指摘して次へ移ることにする（句主　下關市　香津帆君）

愛されて愛する素直なこゝろ持ち

まことにその通りであると言つて仕舞ひたいが、戀は曲者とやらでさうでない場合が多いので困る。そこでこの句のやうな純情さもうけ入れられるのだが、素直な心持と言ひきつてしまはないで

愛されて愛す心を持ちつづけ

と素直さを句面から消しても、受身な素直さは決して失は

れはしない。（句主　大阪市　眞津枝君）

戀人と來た日の奈良に雨の降る

これで句として一つ型にはまつて居るがこの奈良がちつとも利いてゐない、然し斯うした動く句は柳誌のすべて充滿してゐるのだから、この作家がこれでよしとするも無理ではない。句をまとめる術を既に體得してゐるこの作家は句に魂を入れることを覺えるのが急務である。（句主　大阪市　謙南坊君）

老文士フトのハズミで戀に落ち

フトのハズミとは何と御叮嚀なことであらう、私達は重語の効果を狙ふこともあるが、これはそうとも取れない、それに片假名にしたことも下らない、戀に落ちた老文士に題材を得るなら

老文士自省しながら戀に落ち

の平凡さを保たせるか戀に燃える凄まじさへでもピントを合はせた方が、それらしい。（句主　高松　柳夢君）

ふと履きし女草履の踏み心地

このふとは利いてゐるが、これは戀とは言へない、女草履の主が戀人としてもそれは句面から感じさせることは出來ない。全然觀點を變へて

沓脫の革履にときめきを覺え

とすれば男でも女でもいい兎に角來てゐる人とそれを知つた人とのつながりが仄かに感じられる。（句主　兵庫縣　淳二郎君）

以上を以て「枕」と「戀」を終つたが、大阪へ來て一ケ月の暇寓は、私の生活に激變を與へたと見えて、健康に變調を來してゐるので、たださへ廻らない筆が常のやうに運ばないことを意識しつつこれをまとめたので自分でも不滿に思つてゐるが、もう一回休むことはいけないと思つて責任を果したが、こんどの「風」でこの埋合せをするつもりでゐる、どうぞ惡しからず。

句あり

「天來で治つた話リウマチス」
「肩のこり母天來を離さない」
又「强打者へ母天來をはつてやる」

▽肩のこり　▽手足の痛み
▽神經痛　▽リウマチス
▽肋膜痛　▽運動の前後には

絶對かぶれぬ、スグきく

白色の鎭痛膏『天來』が一等です

▽價　二十錢　五十錢　一圓

左記にて試用品を無代進呈す
（大阪市東區淡路町三　船場ビル）
發賣元　松井啓商會

川柳塔

路郎選

雲の峯蟹をみつけた兒の眞上　大阪　麻生　葭乃

花粉に醉へり淺はかなる事よ　同

くちばしの青いお世辭をかなしめり　同

行水へ目上に當る人が來る　大阪　高橋かほる

仕立屋の二階女の聲で呼び　同

いなびかり同じ所で又光り　同

西瓜どうだすと大和の果物屋　同

☆

手のひらに五十錢とは淋しい日　大阪府　朝田　新水

困ることと承知の上の前借し　同

ザラにあるその秀才をひき拔かれ　同

召集令待つてるとこを通りすぎ　同

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

催

▼阪大川柳會（大阪）は八月例會を二十五日午後五時から芦屋の如水集（谷戸氏別莊）に於て關根山彦博士の歸朝歡迎句會として開催した。

▼川柳國まつしま八月句會（大阪）が十二日夕から松島町の道德會説教所で開かれた

▼川柳國納涼句會（大阪）は八月十四日玉造の三光神社で開催された。

▼大阪媛柳川柳社（大阪）では八月廿一日

心太子の手をにげて青畳　兵庫縣　水谷　鮎美
さくらんぼよきあいてをばみつけたり　同
鳩を配して戀人は背なをむけ　同
街の風陳列にある日本刀　同

文豪モラエス翁を墓ふ（二句）

戀の墓さびしく蔦がひしと抱く　大阪　姫田　夕鐘
ワタクシウチヘユキマセンカと手を延ばし　同
蚊張で生捕られた日曜のお父さん　同
齒が拔けて女將外出を見合しぬ　同
孟蘭盆は佛に會へる飾りやう　同
行末は顏の美貌にまかしとき　同
鋭氣を養ひに朝霧を突く　同
田舍に住めばアスファルトも戀し　同
それまで言はずともと娘は泣くばかり　同
笑ひ話へ千人針が通るなり　同
犬が曳く異動乞食へ坂となり　同
急病へ女醫簡單服で脈をとり　同
とび込めば客と藝妓が湯にひたり　同

午後六時から端の坊で鑑賞と作句の夕を開催。

消息

▼福田東京支社長房相方回に出張來信があつた。「絶景のこゝも心中するところ」犬吠岬にて山雨樓。

▼上京された脇田梅子女史から「花戀坊もう來る筈、啞三味は社が休みなので連絡が取れず逢へさうもなし、明日江之島鎌倉明後日熱田神宮に皇軍の武運長久の祈願をなし孝三郎のやもめ暮らしをなぐさめて歸阪します」と八月十八日附で賴りがあつた。「鹿島立ち先づ宮城をふし拜み」

▼阪大川柳會の關根山彦博士（大阪）は歐米視察研究のため渡歐されてゐたが八月六日無事歸朝された。

▼本社名古屋支部幹事吉田水車君は同君個人の立場で在名古屋の川柳懇和會へ加名された。

▼姫田夕鐘君（德島縣）は八月早々に歸阪される筈であつたが暑さのため令閨の病態を案じられて延期された。

▼濱田久米雄君（廣島）は八月一日江田島の海軍兵學校を見學されたとの事。

ぶどう棚人を追ひ出すきつい雨　同
算盤入れる女將の尻へ煽風機　同
その奥が聞きとうなつてジョツキ言ふ　同
素女描く顔になりゆく土用灸　同
長二郎こんな子供があるのなり　名古屋　吉田　水車
デパートの一とこひまをもてあまし　同
役のない其他大ぜい蚊をはらひ　同
故障バス睦じさうな二人ゐる　同

かほるさんへ

かほるさん極彩色の便りかな　同
燈火管制虎刈りにして貰ひ　大阪　須崎　豆秋
燈火管制なめくじが出て來たり　同
千人針日本女子の顔になり　同
稍醉がさめて欠勤屈書く　同
馬に草やるを忘れず兄は征き　大阪府　妹尾　變人
兄の征く肩身の廣さ驛を拔け　同
食臺をつぎ足してゐる久し振り　同
履歴書へ考へおくのひやゝかさ　同

▼塚越正光君（東京）は岸本廣告研究所を辭し八月二十日夜の夜行で歸東された。

▼妹尾變人君（不朽洞會員）の義兄のことで、去る二日歸省されてゐた。歸阪後健康を害されたさうだが大したことはない由。

▼正木琴舟君（宵島）から八月九日附のお賴りがあつたきりで以來消息がない。今何處へ避難されてゐるか案じてゐる。

▼伊志田孝三郎君（名古屋）が靜岡から、「まりこのところで大空のこゝろかもといふ寸法です」といふ便りに接した。同じ葉書の中に樂狐君、柳葉女さん、靜江さん等のお便りがあつた。

▼朝田新水君（不朽洞會員）は職業柄時局のため多忙を極めてゐられるさうだ。

▼勝谷山川兒君（松江）は役所の野球も終り、重要事務も大低かたづいたので、ぼつ〳〵川柳へ力を入れるとの事。

▼石崎柳石君（今治）は日本アルプス登山の歸路白柳子、申仙兩君の案内で來社された。其夜川柳國主催の歡迎句會へ本社路郎主幹も列席された。猶、同君は歸國後嚴島へ墓參のため歸省され廣島で古弗君に會れた由の便りに接した。

子を抱いてもろて千人針を縫ひ　同
アトリエを建てる話は聞き飽きる　大阪　西いわを
藤椅子にひる寝の顔のいかめしく　同
櫻んぼ歌劇雜誌とお嬢さん　同
出征と海水浴の人の波　同
召集の椅子二つ三つ空いてあり　同
召集令眞赤になつてゐるトマト　同
縫ふだけは縫ふてもらつた千人目　大阪府　宮岡　白峰
國民の足が揃つてゐる眞夏　同
タイヤーの跡を殘してゐる暑さ　同
赤蜻蛉今日の試合の空を飛び　大阪　後藤　青兒
眞物の翡翠とわかり箱に入れ　同
動物に憐みがあり牛の笠　同
千人針の中を通つた胸さわぎ　同
大ジョツキ胃の容積を疑はれ　同
水車小屋都會の人を止まらせる　同
込入つた話へ子供せきたてる　廣島　鳥生　古弗
宴會の席でキングの手品が出　同

▼椙元紋太君（神戸）はふわうすと百號記念川柳大會が來る九月十二日正午から湊川公園神戸市立勸業館で開催されるので、その準備に忙殺されてゐられる由。
▼阿部佐保蘭君（東京）は九十九里濱へ八月中避暑された。
▼西田艸樂君（不朽洞會員）は十六日より令息と共に丹波地方へ旅行され、十九日歸阪された。
▼岩崎柳路君（淩源）は熱河省淩源の舊住所に落着いたとのお頼りに接した。郵便物が非常に遲延して二週間からかかつてゐるが、夫妻とも無事とのことですから御知らせする。なほ同君の通信によつて天津の和田默然人君も無事だとのこと。
▼橋本綠雨君（不朽洞會員）は八月十四日室生寺から奥香落溪へハイキングされた。
▼竹重虛心君（大阪府）は近く學校生活に復活される由。
▼潁原退藏君（京都）七月下旬頃から宿痾が、いさゝか惡化し、今なほ安靜を命ぜられてゐられる由。一日も早く御全快を祈つてゐる。

變化ある雲だいつしか灯がともり　同

アツパツパ暑さに負けて居る姿　大阪　加藤ライト

ハンカチへ都會の汗を黑く拭く　同

晴衣着た夏へ暑さの愚痴が出る　同

商賣も書いて最負へ幕をやり　同

牛車まだ渡り切れずに赤となり　同

船渡御を暑中見舞へ書き添へる　同

寢卷でもよし防空の暗さなり　同

☆

精神に惚れたと顏に惚れてゐる　仁川　池田可宵

子が四人グツと我慢をした女房　同

たまに來た父病室の窓の世話　同

エプロンの白さ新妻なればなり　同

鄕を發つ感激死んでよい覺悟　同

疊屋の足袋が氣になる表替　兵庫縣　長崎柳秀

カン〳〵の飛ぼう〳〵と風が吹き　同

ベットへはみんな嘘つくことに決め　同

下宿を替へて過去にふれまい　廣島　植山九天

村夫子君を悼む

▼多喜健一君（東京）は八月六日來阪寶塚ホテルの一室で、三重苦の聖女ヘレン・ケラー女史の聲を最初のレコードとして錄音された。

慶弔

▼本社梅田支部同人增元翠陽君（兵庫縣）の令閨は七月二十七日午前七時四十五分三男芳伸君を儲けられた。

▼柳壇の長老高木角戀坊君（東京）は八月六日午後二時二十六分神田駿河臺杏雲堂病院で逝去された。謹んで哀悼の意を表する

▼成田桂花君（根室）の武乃夫人は八月十三日午前七時永眠されました。謹しんで悼む。

▼戸倉晋天君（兵庫縣）の母堂が八月十九日午後七時半に長逝されました。謹悼。

▼平井與三郎君（大阪）の令閨節子さんが八月十五日午後九時永眠された。合掌。

▼石井默平君（大阪）は十七歲の令孃を八月に喪はれた。同情に堪えない。同君の健康を切に祈る。

碁盤の顔が君のほんとのかほだつた　同
禁酒禁煙醫者は平氣で申しつけ　同

出征を送る

軍刀の重さ炎暑を突きぬける　同
死んで來いそれで事足る面會所　同
苦しさの中にゆるがぬ趣味を持ち　廣島　濱田久米雄
一日の希望にゆれる洗面器　同
暑中御見舞畫寢の足へ來る　同
戰勝へニュースはありつたけの聲　同
召集につき休業と貼り出され　同
夏の陽の眞下銃後の氣が揃ひ　同
乘船の明日は異國の汗をふく　同
螢かごくるわの畫に似たまひる　今治　渡邊曉童
醉ふたのを送つた腹で稻荷ずし　同
內金をする肚をきめさつばりし　同
今ニュースムシバの痛み待たされる　愛媛縣　今川椋影
煽風機儲け口へと眞直に　同
歸らうとすれば花火の又揚り　同
言へば言ふ理窟あるものエゴイスト　同

轉居

▼加藤文醉君（名古屋）は名古屋市東區若水町二丁目五十八番地へ轉居された。

改號

▼八十島勇魚君（東京）きやり吟社の八十島杜若君は勇魚と改號され令息獨樂平君が襲號され二世杜若を名乘られることになつた。

▼北坂一夫君（下關）は同姓同名があるので櫻川不水といふペンネームに改められました。

正誤

▼前號九頁下段六行目、島田翠峯は嶋田翠峯の誤。▼同三七頁下段寫眞說明中、純子と一歩の間にリリの二字落植。

▼前號二八頁下段十八行目へ左記落植挿入のこと

「昭和十二年七月十五日發行。四六版假綴一〇六頁。定價五十錢。發行所金澤市博勞町二七（西田方）加能川柳社。」

誤記・錯覺の訂正係 (一)

―柳誌柳書より―

▼川柳「京ばし」(第二卷第五號)の第四頁掲載、「私の觀た角戀坊」(關口文象)の記中の書き出しに、

『角戀坊は馬鹿である』とは、その昔岐阜の青柳から放たれた一矢、痛快がる者、憤慨する者、氣の毒がる者、敢て當人辯明にも當らなかつたが、餘り好い氣持はせなかつたらう、何んと云つても未だ三十代の若さ、一笑に附したと云ふ形でけり。

とあるが、『角戀坊は馬鹿である』の一文は大阪の故小島六厘坊の筆で『葉柳』第三卷第一號の十七頁に掲載されたものであるそして『角戀坊は馬鹿である(再び)』が同誌第參卷第貳號の十八頁に掲載されてゐる當人辯明にも當らなかつたがとか、一笑に附したと云ふ形でけりとあるが、六厘坊が再び筆を執つた記事中に、

「……前號の攻擊文が氣になつたと見えて茶喜次と云ふ男に『六厘坊はふなである』と云ふ文章を書かして居る、茶喜次は東京の新進作家で時次郎と共に時々いゝ句を吐く男だが僕には少しも關係のない人間だ……」云々と書いてゐるところを見ると萬更一笑に附した譯でもなからう。

▼山川花戀坊編昭和川柳類題高點句集の跋(品川陣居)の第二頁に

「…昨秋、啞三味・陣居・花戀坊の「三人旅」が關西方面へ企てられた時、圖らずも大・大阪の大玄關梅田驛頭で吾々を迎へてくれた大阪市會議員夫人脇田梅子女史當時の石坂梅子さんが」

の記事中に二つの誤謬がある。その一つは出迎へたのは大阪驛頭であつて梅田驛頭ではない。梅田驛は貨物驛であつて大阪驛の西北隅にある。大・東京の大玄關新橋驛頭に出迎へてくれたと云うのと同じ誤謬である。その二は脇田梅子女史は教育タイムス社長脇田勇氏の夫人であつて大阪市會議員夫人ではない。脇田勇氏の亡父淺倉義氏が市會議員であつたので、筆者の誤聞であらう。

川柳指導講座

本社の指導講座は平易懇切、全く手を取らんばかりにしての講座振りです川柳を作りたいが、どうしたらいゝかと迷つてゐる閑に、五七五中心に、課題によつて作り、本講座へ送られるのが捷徑です。

講　師　塚越正光先生

課　題　「說教」　一人一句

締　切　九月廿日

本社宛「川柳指導講座句稿」と明記する事

川・柳・横・町

☆

東京の電車の中で柳誌を手にしてゐた人へ「あなた川柳をおやりですか」と山雨樓が聲をかけた。それで川協會員になつたのが金佛。

これこそ熱と熱の火華。

☆

久留美が路郎を訪れた時、久留美が持參してゐた「京」の寄せ書の扇子を見ながら、「この中で三面子が亡くなつたが次は誰やろ？」二人は期せずして角懸坊の名を指した。それは七月のことであつたが八月六日には悲しくもこの豫感が的中した。殘る人達よ、切に自愛を祈る。

☆

下關の香津帆は同姓同名が同市で、しかも同業に二名もあるのでペンネームを櫻川不水と改めた。

☆

水府や雉牛子が、番傘の座談會で川柳の醜譯がどうの斯うのと云つてゐるが、いつ何處で外國語の勉強をしたのか、おそろしい世の中だ。（不死鳥）

ルービサア

宮内省御用達　大日本麦酒株式會社

一路集

募集句

忘物

高須啞三味選

自轉車を忘れて歸る球に勝ち　沐天
言負けて考眼鏡を置いて去に　水客
親類で忘れ電話で事が濟み　三巴
忘物二度にですよと笑はれる　千代香
拇印して貰うて歸る忘物　三巴
見送りへ何か忘れた樣にゐる　水客
忘物知らぬ人から届けられ　流葉
散髪のついでに廻る忘物　鮎美
錢湯にたかの知れたる忘物　文庫
忘物下女に教へて鍵を貸し　都之介
二日醉手痛いものを忘れて來　夕鐘
忘物さがす順あり梯子酒　由布
忘物女給たかつて攜げたて　千代香
忘物何か出さうで手をつけず　芳岸
爆發をしさうに圍む忘物　同
忘物車掌迷惑さうにさげ　雨聲
忘物汽車の窓から呼んでくれ　龍城
忘物電車はカーブ曲るとこ　岩石
忘物次の列車で戻つて來　菊路
忘物驛長室でお辭儀する　春集

十　秀

よく物を忘れて博十號を持ち　葉光
明朗なゴシップになる忘物　同
忘物常連といふ氣の強さ　夕鐘
忘物ついでに傘を持つて來い　都之介
忘物ついでに寄れる家があり　葉留路
又逢へる口實がある忘物　美和夫
忘物はつきり云へるものでたし　同
乘替へて搖れて氣づいた忘物　由布
温泉の宿へシャツも忘れた便り書く　沐天
友人の忘れた本に夜をふかし　和夫

五　客

ポケットの數だけ探す忘物　五扇子
忘物幹事一汽車おくれて來　靜波
忘物女の匂ひ匂はせる　芳岸
普請場へ提灯で來る忘物　謙南坊
ある所にはあるなと思ふ忘物　勇坊
(人)忘物行くには金のいる處　水客
(地)忘物犬もあわてゝ引返し　都之介
(天)事務所みたち動く專務の忘物　天沐

仲人

納盃で仲人肩の荷をおろし　菊路
仲人を信じないのも親心　文太
仲人を親に持つ娘が嫁きおくれ　紫浪
仲人の髭が近頃偉く見え　瞳

朝田新水選

先樣を賞めて仲人よく喋り　ライト
仲人とぴつたり逢うた百貨店　紫香
白足袋で來た仲人の長話　謙南坊
仲人は私の見る眼も附け加へ　沐天

仲人の蔭に花嫁小さる居る　蕉雨路
仲人を忘れる程の圓滿さ　芳岸
仲人の顏今日も同じなり　天作
仲人も數を重ねて白髮を見　和夫
口數が過ぎて仲人まとまらず　美津枝
仲人の下戸へよき日の夜がしらみ　由布
力なく笑ひ仲人斷られ　帆加夫
仲人へまじめ顏して嘘を聞き　浮草
そうだともそうだとも仲人膝を打ち　流葉
氣にかゝる嘘を仲人一つ言ひ　曉童
仲人は晝の電車で急ぐなり　同
仲人のさすが世馴れた金屏風　龍域
仲人にされた若さへ困るなり　同
仲人に昔話を聞かされる　水客
夕立のさなか仲人やつてくる　同
仲人に其の日の事を教へられ　美和夫
仲人は妹の齡も聞いて去に　同
仲人になつて世間の事も知り　斗風
長男の名も仲人へ持つて行き　同
仲人を無駄足にした虛榮心　五扇子

仲人好き再緣の口賴まれる　同
仲人は吾が子に欲しい二人なり　岩石
仲人に或る日の不覺見てとられ　同
月下氷人吉日迄を馬鹿になり　可礫
仲人は冷汗の出る嘘を云ひ　同
仲人はちと吹き過ぎたなと思ひ　三巴
仲人は聲大小につかひ分け　同
仲人の氣持ほどでもない相手　潮花
間の悪い時に仲人顏を見せ　同
仲人口乘氣になつた母を責め　巷二
仲人へ借りられて行く邪の目傘　同
仲人をこり〳〵してる人の好さ　葉光
仲人も好きで子のない夫婦なり　同
粹な氣の師匠仲人買うて出る　春集
仲人の豪傑笑ひ板に付き　同
仲人へまともに向けた煽風器　靜波
仲人の或時腹も立てゝ見る　同
三面記事もう仲人はこりました　千代香
仲人は此所が關所と扇子立て　同
仲人の話が違ふ事にふれ　朔風

仲人は鼻の高さも言ひ添える　同
仲人の出世話のあとやさき　鮎美
仲人のうれしい扇子半びらき　同
過去堅く秘めて仲人まちに來　南濃路
仲人は寫眞屋さんに使はれる　同
仲人は急所を刳る如く問ひ　文庫
仲人も知らぬ欠點持つてゐる　同
仲人として茶柱を見逃がさず　都之介
仲人もまづい化粧と思ふなり　同
仲人に逢ふてしまつた千鳥足　同

五　客

仲人が職業と云ふ眼のうごき　夕鐘
仲人の言ふ男性に氣をひかれ　五扇子
傘さして仲人こけるように來る　鮎美
仲人は自分が育てた樣にいひ　美和夫
仲人もして晩年の安らかさ　朝風
(人)仲人(苦情も出さぬ良い夫婦　瞳
(地)仲人へ母は勝氣のまゝ話し　夕鐘
(天)一も二も皆仲人へ持つて行き　謙南坊
(軸)信じては居ても仲人口を知り　新水

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規

一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
二、文字を正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月廿五日とす
五、投稿先は本社宛

阪大川柳會七月例會（大阪）

丸島利生報

夜汽車・水差し・千人針・雜

本省へ榮轉乘せて夜汽車出る　方正
旅づれた女と並ぶ夜の汽車　柳秀
たしなみは崩れ夜汽車は更けてゐる　芳一
赤切符夜汽車の足の置き所　同
やつと寢た頃の驛から乘り込まれ　同
招電へ夜行で急ぐモーニング　淺女
少時は夜汽車の窓の雨の筋　栗
家出の娘らしい夜汽車のバスケット　春巢
トランクが盜まれさうな夜汽車にてたけを
夜汽車今天下の峠を越ゆるらし　路生
女將からいやみ云はれる終列車　淺女
夜の汽車五百羅漢を乘せて行き　香附子
水差を手品に借りる座敷藝　柳秀
水差しがきたのも知らず眼りこけ　路生
朝起きて見れば汚ない水差しだ　同
水差しと枕そうして煽風機　同
水差しへすつきり伸びた眞白い手　正柳
水差しへ講演なれぬ手の運び　同
水差しは下手な辯士やなと思ひ　淺女
新家庭銀の水差し欲しい也　春巢
水差しも今日の御氣嫌知つてゐる　たけを
午餐會あとは水差しだけ殘り　千秋
香をのこし女水差し置いて立ち　芳一
水差しを小笠原流で運ばれる　栗
ホームドレスにじり座りの哀しけれ　同
王手飛車かけて夕立ほめて居り　同
夢なれば山を倒さに金を盛る　方正
今日の獻立で食ふ主婦の友　正柳
大臣になつて理想へ遠く生き　柳秀
月給日これで男かなと思ひ　同
ポン引は燕返しに背をむけ　路生
八ツ手の葉大きい雨に反抗す　同
赤んぼが病んでバランス破れたり　芳一
戀人へ送る千人針とも云へず　たけを
事變は事變花月へ笑ひに來　同
飴賣りの賣上高を思ふ日よ　芳一
ストローで飲む十八のいいポーズ　路生
おちよやんも千人針の數に入り　橙舍
目を閉ぢて急用千人針を避け　正柳
千人針無言のまゝで針を入れ　青一路
汗だくへ千人針に又出會ひ　芳一
改札へ千人針をよけて行き　路生
裏門の方へも千人針は待ち　同
凱旋は千人針を持つたこと　柳秀
千分の一に娘も針を入れ　筑川
千人針平等主義で出來上り　同
千番の針は公爵夫人なり　同
千人針は母をいたはりつゝ縫はれ　千秋
千人針賴む老母の神々し　同
千人針子を持つ親のほこらしさ　同
千人針縫つて小走りに追ひつきぬ　栗
千人針へ香水を匂はせて去り　同

千人針橋の秋を根據にし　同
千人針の輪へ夏の月が更け　同
千人針しばし子供をあやかして　たけを
千人針その襟筋を見つめられ　同
氣の毒な千人針を涙ぐみ　同
手のぬるい人へ千人針がまわり　同
逃がすものかと千人針は立ち　路生
御主人は千人針へ待たされる　正柳
ソウ押しなはんなと千人針結んでゐる　路生
千人針父は笑うてゐるばかり　柳秀
千人針を圍んだりアッパッパ　たけを
九百五十で千人針に日が暮れる　路生
千人針千人力に身をかため　路郎
子をもつて千人針へどきつとし　同

雜川

鶴町支部句會（大阪）

七月八日　於　岩橋岩石居　加藤ライト報

避暑・ラヂオ・紋日・植木　保險・ボート

戀もなく避暑を讀書で暮してゐ　小柳子
避暑に來てトマトの滋養聞かされる　謙公
お隣りは避暑留守番を賴まれる　イクエ
物干の避暑へ奇麗な星とゐる　岩石
避暑からの便りは朝の海のこと　松太樓
戀を弄んでゐる避暑地　よしみ
避暑に來てニコリともせぬ娘に出合ひ　岩石
蛇の居る事を忘れて山の避暑　小柳子
涙花節長屋總出のラヂオなり　清柳子
はなし家はマイクに一寸頭下げ　禿光
寢ころんでラヂオ勿体ない話し　變人
双葉山負けてラヂオを叱りつけ　のぶを
嫉妬する妻へラヂオやかましい　巨童
薄給を割いたラヂオは母のため　イクエ
正確にラヂオに合し宵を寢る　ライト
當選をラヂオで聽いて寢つかれず　變人
夕顔へラヂオ涼しく聞いてゐる　小柳子
恢復期ラヂオの料理聞いてゐる　謙公
込み入つた話ラヂオを止めさせる　變人
ラヂオ屋の表ヒットの聲になり　謙公
醉ひざめの水へ放送濟んでゐる　ライト
來客へ子供の時間切られたり　小柳子
心配をさせぬラヂオの聲となり　變人
中繼へ舞臺が見たい拍手なり　ライト
東新の聲にラヂオがとめられる　よしみ
その顏が見たいラヂオの甘い聲　同
ラヂオもうしまい女中は手紙かく　變人
增車した電車へ紋日雨となり　よしみ
働きに行く身紋日にもまれてゐ　岩石
子を連れた紋日風船邪魔になり　寛柳
雜踏へ聲をかからしてゐる紋日　よしみ
レヂスターつぶく紋日にくたびれる　變人
角帶も嬉しく紋日金があり　よしみ
一枚のカレー紋日へひまが要り　ライト
夜店客チラホラ植木賣れ殘り　謙公
恩人に賞められてゐる植木鉢　變人
おとなしい氣質植木棚へ見る　ライト
制服のまゝで植木へ水をやり　寛柳
植木鉢さげて夫婦で戻つて來　謙公
水まいた植木へ風の見える宵　變人
戀のボート水の流れにさからわず　小柳子
美くしいボートへ向きをかへてゆき　變人
青春をボートにまかしきつてゐる　よしみ
二人來るボート橋からひやかされ　謙公
本心を聞かずボートとなつてゐる　岩石
ボート屋に小言聞いてる水泳着　ライト
義にからみ情にからみ入る保險　よしみ
保險屋の世辭へ斷りかれてゐる　岩石
子澤山生命保險だけ這入り　よしみ
目を閉ぢて保險滿期に指を折り　變人
嫁入りの歳で受取る保險金　ライト
保險屋の話有利なことばかり　岩石
保險屋は書寢を起し恐れ入り　變人
發育を賞めて保險屋坐り込み　寛柳

雜川

梅田支部小集句會（大阪）

七月一日　於　斗風居　酒井斗風報

スキッチ・夏みかん・瀧・なと思ひ　卜居
スキッチへ妻がおさえた背つぎ箱　靜波
駈けて來てさてスキッチが分らない　同
スキッチを切られて女聲をたて　斗風
舞臺裏スキッチひれる役目なり　鮎美
スキッチはオフ化粧部屋靜なり　朔風
スキッチを入れる離屋に客があり　同
夏みかん畫の娼婦の愚痴を聞く　鮎美
夏みかん妓はまるうなつて食べ　斗風
夏みかん色づき故郷を出る息子　夕人、
遠足におともして行く夏みかん　卜居
釋尼妙雲むいてあげやう夏みかん　瀨戸内海本島にて
島の娘の賣る夏みかん雨にぬれ　斗風

美爪術の指がきれいな夏みかん　由布
瀧の音背中に聞いて山をおり　斗風
瀧よさびしくひとり歸る道となり　鮎美
瀧の音河鹿の聲もとだえ勝ち　斗風
覺悟して來たのに瀧の美しさ　靜波
瀧から奥に石碑があると書いてない冬扇
瀧へきて犬は尾をふるばかりなり　鮎美
まけんなと思ひながらも値切つてみ冬扇
そうかなと思ひ頭を右左　友人
成功して父があつたらなと思ひ　同
甘えたいなと思ひ襁子の一人寢る　冬扇
居眠の鼻へ美人だなと思ひ　由布
ネクタイの色心臟が強いなと思ひ　冬扇
心境はいよいよさえたなと思ひ　斗風
チツプ切つて貧け惜しみやなと思ひ　冬扇
周旋屋家出した娘やなと思ひ　遊歩

川雜 廣島支部句會（廣島）

七月二十三日　於 廣鐵倶樂部
濱田久米雄報

驛長、裸、勝つ、迷信、借物、智慧
驛長も左利きでは五指の中　昇玉
顯官を乘せて驛長胸をなで　久米雄
驛長が來る頃フォーム水を撒き　千代香
驛長もお召列車の中で撮れ　秋史
驛員の美談驛長嬉しがり　葉留路
驛長の腕へさびこむタブレット　須彌山
田舍驛長様が荷を渡し　昇玉
驛長の留守驛員は輪をつくり　星州
飛び乘りも驛長の目で制止され　香月
驛長の眞顏窓から笑はせる　觀峰

無事通過驛長ほつとして歸り　草雲子
藤椅子へ裸北支のニュース聞く　星州
裸婦の繪の方へ女給はすれて行き　香月
番臺の世辭を聞いてる葉秤　秋史
濱寺の裸群を思ふ暑さなり　草雲子
家中の裸西瓜を取りかこみ　秋史
炎暑ぎらぎら高僧を裸にし　昇玉
豆腐屋を呼びに裸の子が出掛け　久米雄
競馬フアン豫想の時にいつも勝ち　葉留路
勝てる非も負けて課長の氣に入られ　康洋奈
先生の嘘を突込む高等科　秋史
日章旗占據の朝へひるがへり　同
スタートの顏はどの子も勝つ氣なり　昇玉
大工とて早稻田が勝てば肉を買ひ　千代香
勝つまでは確つかりやるといふ若さ　草雲子
云ひ勝つて母の涙をふと見付け　千代香
歡聲は母校が勝つた歌になり　久米雄
迷信を笑つて醫者は脈をとり　秋史
迷信を捨てゝ勇躍靴をはき　久米雄
迷信のお百度踏んでまた迷ひ　草雲子
迷信と云はれ信者は意地になり　葉留路
借物へはや夏が過ぎ冬が過ぎ　久米雄
借金がそのまゝでゐた大掃除　同
名物をつけて借物戻しに來　秋史
いゝ智慧を出しなさいよと酒をつぎ　千代香
智慧の輪は後を向いて解いて見せ　須彌山
子の智慧へ後妻海氣味惡くなり　秋史
智慧くらべそこだと母は目で敎へ　康波奈

川雜 松江支部句會（松江）

七月九日夜　於 なにわ館

夏の女、交番所、借家、廻燈籠　勝谷山川兒報
滿洲、蠶、蟹

藤椅子の夫人へ山莊蚊が多し　天痴人
煽風機女の肌の動くやう　大鳥
夏の風をんなの腋毛から動き　夢迷
朝顏へしやがむ女の里心　柳人
美容院夏の女になつて出る　三雷波
煽風機を社長へ向けてタイピスト　天痴人
夏の夜の女ひとりへ流れ星　光二郎
女房も夏は若さを取りもどし　舟帆
夏の雨女の足の白いこと　柳人
廻燈籠寢ころぶ父へよく廻り　舟帆
馬鹿話廻燈籠のある處　十詩路
戀はせはしき廻燈籠の影　莞路
待つ心廻燈籠背立たせ　天痴人
廻燈籠二ア人の戀愛至上主義　笑鬼
權からも廻燈籠を女ほめ　大鳥
廻燈籠の戀をしてゐる　笑鬼
花火花火廻燈籠は忘れられ　三雷波
滿洲視察馬賊に逢ふて戻つて來　舟帆
交番所机が邪魔な總選擧　笑鬼
交番所手帳をさいて書いてくれ　三雷波
醉漢を入れて交番派手になり　柳人
交番所暑さへ威嚴崩れそう　三雷波
交番に風流があり四季の花　柳人
正直な顏を見直す交番所　天痴人
愚かにも蠶の夢は殺される　夢迷
病蠶へ老母の腕の痛々し　十詩路
三眠も終つて農村の桑不足　同

鸞飼ふ吾が家は其の日暮なり　久於　三雷波
鍬だこの手に有がたい鸞の出來　一湖
新座敷此所にも鸞の棚を吊り　笑鬼
鸞が喇つてる眞直な指　大島根風景（二句）
牡丹から鸞へ續くみどり風　柳人
そりこ舟鸞の村の朝を出る　同
子供の手蟹あなどつた爪をあげ　舟帆
童心のいきなり蟹を摑んで來　大鳥
ピーチパラソルを横ににらんだ蟹の群　梟人
蟹とつて眞夏の歡喜に浸る子等　笑鬼
みなし兒の蟹と遊んだころが倖　久於
四十過ぎ借家住ひを淋しがり　三雷波
この町の借家景氣は工場から　大鳥
蚊の多い事もぐちつて住み馴れる　十詩路
晩酌の借家四五軒ある暮し　三雷波

雜　名古屋支部句會（名古屋）

吉田水車報

人間、號外、繩張り、涼み、肩

聽診器この人間も長くない　あやめ
人間の氣まゝさを知る夏の雲　東洋樓
告別式人間としての價値を決め　明亭
人間も馬も疲れたアスファルト　三八朗
戸締りをして人間の寢る弱さ　周花
人間になつて故郷の驛を降り　かづし
人間の眞似に人間手をたゝき　正穗
人間はいつの間にやら嘘をつき　水車
號外を見送つてゐる細格子　周鈴
號外を追ひかけて行く町外れ　水車
箸持つたまゝま號外見直され　周鈴
號外屋お宅は違ふ新聞社　扶桑
號外へ話題が變る應接間　正穗
號外を貰つた男取り卷かれ　すゝむ
號外を貰つて戻るハイヒール　三八朗
號外を拾つて御用聞が來る　文醉
號外へ社長に別な氣を遣ひ　明亭
屋敷町へ來て號外屋息を入れ　扶桑
號外屋配り果して讀んでくる　周花
號外の大きな活字匂つてる　燕人
號外へ軍籍のない口が過ぎ　かづし
號外の鈴株屋街の晝　三八朗
開戰の雲行と知る鈴の音　可宵
鈴の音抑へて歸る號外屋　呂香
男湯がいきなり明いて號外屋　鮮山
號外の裏へ刷り込む開戰圖　芦笑
繩張りの若さをかつて吳れるなり　三八朗
公園が繩張りと言ふ太い杖　正穗
自警團事務所繩張り聞かされる　翠穗
繩張りへ男としての意地があり　鮮山
繩張りへ引張つて來る仲間割れ　同
繩張りがふえたと醉つて戻つて來　周鈴
繩張へ野暮を通して細い腕　水車
繩張りもあつて乞食の坐りやう　正穗
繩張りへ割り込んでくる凄い創　燕人
繩張りへ親分さんの低い腰　同
繩張りの事で採めてる香師仲間　可季
緣日の繩張りへ來る仕込杖　三八朗
繩張りのことで夜店の端はもめ　水車
繩張りが有つて柔道初段なり　正穗
繩張りへ綽名もあつて巾がきく　あやめ
このへんに馴染が多い友を連れ　扶桑
繩張りへ來て二次會の顔が利き　同
借りられる範圍で飲んで終電車　同
瓦斯ランプ親分の顔借りられる　燕人
繩張りへ下りる大祭の驛が混み　明亭
勘當の身に繩張り增えて行き　かづし
涼みから歸へる夫婦に花が買え　明亭
涼み臺やがて女のことで更け　芦笑
夕涼み故郷の風を思ふなり　三八朗
涼み船鵜飼がすんで寒くなり　正穗
涼み舟仕掛花火の近くへ來　かづし
もう一度涼んでくると蚊帳を拔け　可香
涼み臺女の裾に風があり　三八朗
子を籠せたまゝで吊り込む涼み臺　あやめ
人の世の戀を見つけた涼み臺　芦笑
音のする花火を叱る涼み臺　正穗
物干の風が涼しい二階借　扶桑
肩持つてやれば泣いてる女の子　呂香
停年の近い肩子に叩かせる　翠穗
君らしくないぞと肩をたゝかれる　燕人
氣安さのうつかり肩をたゝくなり　芦笑
肩の凝る話一人は窓へ立ち　可香
弟の肩が大きい背廣服　すゝむ
肩揉んでやれば母親眠たがり　あやめ
肩をもむ子供の力あなどれず　鮮山
子の重い事が嬉しい肩車　千疋瓶
號令へ肩を張つてる初年兵　鮮山
後から叱られてゐる肩車　同
肩入れの娘が間違へた舞扇　明亭
肩組んで歩るけば不良じみて見へ　周花

召集へ伍長といつた肩の巾　可香
肩組めば未だ校歌の出る若さ　三八朗
心配をするなと肩を強く打ち　周鈴
肩打てばびつくりしたといふ笑くぼかづし　病院の廊下が長い肩を借り　あやめ
肩を叩かせて繼母まだ叱り　文酔

阪本遠見路君を送る

（住友尼崎句會）

六月六日　於　カナメ食堂

橋本路風報

營門、勇士、名殘
營門を今日は休暇と云ふ歩調　鴨路
バラソルを入れて營門寫される　雄秋
飲むだけは飲んで營門ふと淋し　ゆずる
營門の厳しさ知る砂の上　紫涙
入營を待つ營門の日章旗　素朴
除隊する日の營門は見直され　美知夫
營門へ肉身で來る許嫁　峰月
營門を這入ればお國の臺所　麻斗
營門が近づき歩調にぶつてる　路風
營門の外は祭の笛の音　毬夫
營門へ二年待つ人母とくる　力夫
錦城へ寄せ手の様な入營日　遠見路
非常時に生きる勇士の肩の巾　南濃路
散髪屋で人相變へた勇士なり　辛雅
三女一男我が家の勇士で有つて良し　麻斗
村中の話題となつて勇士なり　榮句坊
煙草をやめた手で銃を持つ　力夫
面會の美人に勇士堅くなり　修藏
勇士の影に涙の母があり　峰月
恩愛の千人針に泣く勇士　守男
はれやかな勇士の顔に氣の晴れる　雄秋
無條約第一年へ此の勇士　鴨路
千人針子が背に勇士の妻がゐる　路風
潮やけも海の勇士といふ誇り　毬夫
祝盃を上げる勇士の目がうるみ　美知夫
出征の勇士を女給蔭から見　紫涙
出迎へ勇士の母として泣けず　毬夫
棧橋は雨ににじんでおりました　毬夫
今日明日が名殘サンデー花の雨　美知夫
云ひきれぬ名殘テープでつながれて　峰月
お名殘りと云ふてはみたが後が出ず　紫涙
同じ事なんべんか云つて母別れ　路風
名殘惜しいと云ふ妓の長まつげ　美知夫
若さあり挨拶ぬきの名殘する　ゆずる
何もかも話すつもりの顔も交り　力夫
一筋の名殘の紙の切れんとす　毬夫
お名殘と云ふのへかんが出來ずぎる　美知夫
今此處で名名殘惜しさは云つされず　紫涙
うれしさは名殘りの酒に酔ふてくれ　南濃路
手を高く高く名殘の盡きぬ船　艸樂
人が來てやつと放した惜しい人　修三
榮轉へ米屋としての君殘惜し　素朴
お名殘りに御飯を妾炊くと云ふ　南濃路
入團か吳か健康祈るのみ　路郎

川柳同好會

六月二十六日　橋本路風報

世話、制服、汗、高下駄、
指、夕暮

世話づきぬ疑ぐる妻に若さあり　峰月
あの仲居誰の世話だか家を持ち　榮句坊
お姿と云はぬが世話になつてをり　鴨路
世話がいがないとうとまれ達者なり　辛雅
世話ずきの男に金がなさ過ぎる　麻斗
世話やきの女房が出した國防費　千峰
世話の禮候文の友水臭し　同
制服にクリームだけと云ふ化粧　素峰
制服の寫眞へ我子探すなり　鴨路
制服で五月のビルの窓をあけ　南濃路
苦學するらしい制服みじめなり　紫涙
これからは制服ぬいだお附合　榮句坊
制服の寫眞飾つて後家でゐる　四一
制服を脱いで老舗の娘に歸り　素朴
制服の一點張がためてゐる　辛雅
寢汗かき焦燥として今日も出る　ゆづる
汗ふいてやつと落つく宵籠　紫涙
プチプルと云はれて金のかゝる汗　美知夫
ボタリ〳〵一日の稼ぎ高　素朴
汗かゝぬ生活で神經過敏なり　麻斗
汗くさい父に抱かれる迎ひの子　美知夫
省電を高下駄で乘る嬉しい日　南濃路
折れ曲るやうに高上駄バスが降り　素朴
親子兼用高下駄ほしてあり　力夫
嬢さんの高下駄丁稚持たされる　四一
高下駄の音忙しいアスハルト　榮句坊
露路を行く高下駄の音高過ぎる　羽淵
高下駄がズラリ稽古屋春の雨　美知夫
高下駄に命拾をした蛙　麻斗
高下駄で女房やつと肩が合い　美知夫
興奮のやりば高下駄急がしく　ゆずる

不器用な男にされた太い指　素峰
駄目と云ふ合圖母指振つてゐる　同
指先にびしり駒音高くなり　辛雅
夏みかんでつかい指へまわされる　美知夫
指きりをしてから膝で寢てしまい　同
行末を問ふやうに指見つめられ　同
アドバルン降りて都會に暮れ迫る　美知夫
たそがれて牛も疲れた足を上げ　同
ポケットの金夕暮が待遠し　素朴
お前の指へはめてみなと云ふ良い男　紫涙

四人座談句會

（川雜鍛川支部）
五月二十三日夜　於　さわだ居
さわだ報

朝、愛嬌、新聞、素晴しい　さわだ
傑作の中に笑がこみあげる　木馬
仲人の口素晴しい美人なり　川柳亭
瞬間に愛嬌の消えた夜の女　木馬
愛嬌の裏に尖つた情があり　さわだ
つゝましい中に愛嬌のある娘　同
新聞を破る子供をうれしがり　同
戀心新聞ひろげただけのこと　同
新聞に載つて逝く人哀れなり　佛心
奥座敷煽風機のうなりと新聞紙　川柳亭
夕刊の記事へみんなの目が揃ひ　同
なま欠伸ころして新聞讀みつづけ　同
口笛のリズムもかろく朝の露をふみ　同
激勵の妻の笑顔に朝を出る　木馬
決心の朝玉砂利をふんで求る　同
朝戻り母だけ悲しい人に見え　佛心

岡町句會（大阪）

港、蚊、星、千人針、瀧　紫香報

港まで歩き話のまだつきづ　稔幸
繪に書いた港へ子供汽車をつけ　風葉
港まで十町ばかし歩かされ　紫香
五年前立つた港へ船はつき　呑水
別れ行く港の朝を霧がはれ　水客
落魄の港は深い水の色　同
出征へ港の街は旗がゆれ　潮花
血ぶくれた蚊が病人の膚へ來る　水客
多い蚊を云はず自慢が赤い屋根　風葉
運轉手無賃乘車の蚊に喰はれ　潮花
寢室の隙間に星の一つ見え　紫香
第一線兵士は星の野邊に伏し　風葉
星仰ぎ肩まで浸る野天風呂　なほみ
二番星下駄屋の女中又見付け　美津枝
立志傳星のふる夜の故郷を出る　水客
千人針の傍を出征兵士行く　呑水
賑やかに娘千人針を縫ひ　風葉
暮れ切つて千人針の娘がかへり　美津枝
ハンドバッグ路上に置いて針をとり　稔幸
酔つた眼へ千人針の娘がきれい　水客
瀧一つあつて名所に數へられ　春坊
一枚は瀧へ並んで寫される　美津枝
此の瀧を今見てゐますと便り書く　なほみ
瀧へ來て落葉のしめり踏まされる　潮花
駒下駄で行けば小つちやな瀧が見え　紫香
箱庭の瀧隅つこで作られる　同

なんでもクッツク
金拾錢ヨリ拾五圓マデ
政府登録
ベニヤ糊
本舗
木。竹。ガラス。石。セトモノ等
全國各百貨店。文具店。藥局ニアリ
南塲亀三商店
大阪市順慶町通一丁目
電話船場㊸三五七八番
振替大阪七四五五五番

大阪の古本屋

大阪市西區南堀江通一丁目
荒木伊兵衛書店
支店　朝日ビル二階專門大店

大阪市南區西清水町八番地
古典籍 一般
石川清和堂
振替大阪七三五八一番

公立社書店
大阪市南區日本橋南詰南入
電話南五六二一番

大阪道頓堀
天牛本店
電話南二七四八・二七四九番
振阪五六六五〇番

趣味の古本屋
尾上蒐文堂
大阪市南區墨屋町五番地
但シ心齋橋周防町東へ一丁北側

大阪市道頓堀筋日本橋南詰東入濱側
天牛第二書房
電話南(75)一五六三番
振替大阪七一五四三番

和漢洋書賣買
更生堂書店
大阪市西成區玉出本通一(玉出驛東)

高尾書店櫻橋店
電話北七〇〇七番

横縦輯編

▼前號は病中の編輯にもかゝはらず讃辭を以て酬ひられ感激を深くしてゐる。本號も病人續出の中にあつて、辛じて刊行し得たものである。私の手の疼痛は今なほ去らない。責任痛感執筆遲々從つて數日の遲刊を來たしたことをおゆるし願ひたい。

▲前述の狀態にあるので「川柳名句評釋」「喫茶店のAとB」「柳誌要目」の休載を諒とされたい。

▼しかし誌面の刷新については絶えず考慮を拂つてゐるので大いに期待していただいていゝと思つてゐる。其の第一の表はれとして次號は「武玉川新研究號」としてオール川柳人並びに讀書人必讀の內容を盛る積りだ

▼「諸家雜筆」は相當滋味のあるものになつて來た。

▼我が社では今秋の柳翁忌から公式の發表には「川柳忌」の名を用ゆることにした。これはふあうすと社提唱の「初代川柳忌」の主旨に贊し歩み寄つたものである。何故初代の文字を略したかは說明するまでもなからう

▼私はもう何んぺ死んでも不思議でない年になつてゐるので、いつなんどき本誌を後繼者の手に渡してもいゝだけの內容充實に努力してゐる。

●「川・協」の仕事も「川・雜」の仕事だなんて考へてゐるやうでは柳界の將來を一體どうする氣なんだらう。僕は唯、微力を悲しむのみだ。

▼病人があつて營業部の事務は緊急なもののみを私が見てゐるので、前金切をお知らせすることが出來ない。もう切れてゐるだらうと思はれる方々は至急御拂込みを願ひたい。兵糧が切れてはガン張らうにガン張れなくなるので、特にお願ひする。

▼書きたい事は澤山あるが、すべては健康の回復をまつことにする。

▼終りに暑中見舞や病氣見舞をいただいた方々の御好意を深謝して筆を擱く。（路郎生）

川柳雜誌社

川柳忌

九月 18 夜七時

會場 誓得寺（電南四八八六）大阪市電清水町停留所一丁北ノ辻西入

兼題 『故人』三句 東魚選
『袋』三句 艸樂選

柳話 時變と句 麻生路郎

會費 二〇錢（川協會員章提示の方は一五錢）

呈賞 兼題 天位に粗品を呈す（出席者に限る）

乞鉛筆持參

川柳雜誌社

大阪玉出本通三・電話天下茶屋二五七九

幹事 艸樂・豆秋・いわを・ライト・里十九

社關係の人々

（いろは順）

賛助員

池澤樂居　國枝史郎　大島濤明　窪田銀波樓
長谷川一徹　藤村作　大谷五花村　安川久留美
大道弘雄　藤本卯之助　大西長三郎　前田雀郎
岡本一平　穎原退藏　小川武　前田五健
片岡直方　赤井清司　亀井晟修　食満南北
笠原路生　淺田一　川村花菱　高知支部（高知市）
末弘嚴太郎　川上三太郎　篠原春雨　梅田支部（大阪市）
嘉納純　柴谷宰二郎　田邊支部（和歌山）
田中辰二　米村あん馬　姪子省二　簸川支部（島根縣）
長崎柳秀　伊藤彦造　田村孝之介　藤里好古　鳥取支部（鳥取市）
長岡半太郎　谷脇素文　小林不涙人　松山支部（松山市）
長野晴濱　鳥山一歩　生方敏郎　森東魚　酒井大樓　中島鐵州
沖野岩三郎　高尾亮雄　明石柳次　尼崎之助
京都支部（京都市）　辻左馬之助
水谷鮎美　國澤春水　亀井晟修

不朽洞會員

橋本綠雨　岩崎柳路　妹尾變人　石曾根民郎
高橋かほる　北山悟郎　大西八歩　中西おさむ
福田山雨樓　水谷鮎美　須崎豆秋　大鶴喜由
西田艸樂　朝田新水　春元紀太　原史風
永田里十九　姫田夕鐘　松下小柳子　江戸みつる
山本丹路　村松夢裡　西いわを　近藤勇
★生田翠夢　市塲沒食子　後藤宵兒　加藤ライト
吉田水車　宮岡白峰　鳥生古弗

川柳雜誌社

主幹　麻生路郎

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
神戸支部（神戸市）　亀井晟修
函館支部（函館市）　水谷鮎美
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　辻左馬之助
田邊支部（和歌山）
簸川支部（島根縣）　尼崎之助
京都支部（京都市）　明石柳次
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　酒井大樓
御旅支部（大阪市）　江戸みつる
天王寺支部（大阪市）　須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）　宮岡白峰
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川兒
大鐵局支部（大阪市）　山本喜由
西條支部（愛媛縣）　荒井英賀夫
光耀會（大阪市）　竹内機見女
今里支部（大阪市）　市塲沒食子
今治支部（今治市）　月原宵明
光笑會（大阪市）　永田里十九
伯耆支部（鳥取縣）　三鴨美笑
竹原支部（廣島縣）　松井可笑
十三支部（大阪市）　淺野牧人
臺中支部（臺灣）　宮内耕朗
兵庫支部（神戸市）　三崎陽幸
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）　吉田水車

川・雑・案・内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）
啟蟄、鄙鶯、句會案内、柳書廉告、その他

川・雑・句・箋

「川柳雑誌」への投句は桝形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。
句の書き心地もよいし、選者が選句されるのにも、便利なので特におすゝめいたします
送費は本社で負擔いたします

八十枚綴　一冊　金十五錢
同　二冊　金廿五錢
御申込は川柳雑誌社へ
＝切手代用も可＝

染筆頒布

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左ので頒布致します
軸箱入　二十圓・額　二十圓
小物五圓・短冊　三圓
御申込は前金で發行所へ

合本特賣

川柳雑誌の合本第二卷より第十一卷まで
各一卷　金壹圓五十錢
第十二卷及十三卷　金參圓
送料大阪市内　一冊六錢
市外　一冊二七錢
御申込は前金で川柳雑誌社へ

殘本分讓

川柳雑誌の殘本が少數宛ありますので、左の通りで分讓申上ます
第二卷より第三卷迄　一冊　十五錢
第四卷より第十二卷迄　一冊　十錢
第十三卷　一冊　二十錢
（送料一冊一錢）
御申込は前金で川柳雑誌社へ

懸賞川柳

「ボマード」「軍歌」　九月十日　十月十日
課題
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏秀逸數句に謝を呈す
宛先　大阪市西成區玉出本通三ノ三六　麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

「後の蜜柳」を頒つ桝形四頁三部十錢、切手代用二錢五枚
川柳雑誌社宛

「大正川柳」第五一號及び第五八號相當の代價にて讓受けたし
川柳雑誌社内BB生

廃業御挨拶

お馴染のキング喫茶室も昨夏私が發病以來、全く店務に携はる事憾が出來なくなりましたので遺憾ながら廃業いたしました。永年御引立にあづかつまして居りました皆様へ御禮狀差上ぐる筈でございますが、庭に病人延引出いたしまして居りますゆへ失禮ながら廣告で御禮申し述べます。
目下家折柄、何かと御入用の不本意なれども何卒御禮申上げます。
誌上にて萬々御禮申し述べます。今後ほ、
眷顧の程伏してお願ひ申上げます。
麻生葭乃

川柳を作る人愛好する人の必讀誌毎月一日發行一部廿錢送料一錢
川柳倶樂部
東京市牛込區揚場町八
川柳倶樂部社

東海の代表誌
川柳草薙
一部一〇錢一年一圓（郵税共）
名古屋市南區八熊町寺田一一五〇
發行所　草薙川柳社

川柳きやり
菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四六八
川柳きやり吟社

川柳氷原
一部二〇錢一年貳圓（郵税共）
小樽市花園町田中尚子方
發行所　川柳氷原社

月刊
川柳
みちのく
一部十五錢一年一圓五十錢
青森縣黒石町
發行所　川柳みちのく吟社

川柳句集 街の雑音

檮本綠雨著　麻生路郎序

定價五〇錢
送料四錢

☆作家生活十三年、默々として吐き出した著者その儘の生きた姿、一讀再讀人生の底邊に觸るるものあらん敢て薦む

清酒
白鶴
ハクツル
元壽發
嘉納合名會社
天奉・遠大・川仁・城京・戸神・京東・阪大

美髪は紳士道！

御使用後さてもスマートな灰皿になる新案容器！

フケ・カユミを止め白髪・若禿を防ぎ明朗な青年美を創る伊豆椿ポマード

頭髪のホルモン劑（コレステロール配合）

伊豆椿灰皿ポマード

植物性　五十錢

全國百貨店・有名化粧品店薬店、小間物店にあり

伊豆椿香泊本舗
大槻彩芳園

菊正宗

宮内省御用達

株式會社 本嘉納商店

漫畫センション

大阪漫畫トリオ同人

小川北幹

武夫

☆一大事

御隠居『アシの入歯が見へないが、誰れか慰問袋に入れはしまいネ』（武）

☆雁の嘆き

雁一『今年の支那の空は物騒だネ……』

雁二『詩の都が死の都に替ったのさア……』（みきを）

★柳人素描

(六) 後藤青兒君

句會の名司會者福田山雨樓君が東京へ轉任してから川柳雜誌社で司會者の詮衡を行つた時、白羽の矢が立つたのが後藤青兒君だつた顏が似てゐる譯でもないのに、青兒君は山雨樓君に似てゐるといふ聲があるのも、その性格や態度の上に幾分斯うした共通點があるからではあるまいか。君が川柳を作りはじめたのは昭和六年三月である。

活字まで少さくされて退職す
諂へば蟻蛉が笑ふなと思ひ

の如き諷刺皮肉に君の句風を見る。川柳外の趣味としては闘、犬、小鳥。君は鳥取縣東伯郡下中山村の產、現在は大阪市東成區南生野町に住し、三男一女有り、日本樂器株式會社大阪支店に勤務してゐる。本名は政宣(まさのぶ)、山雨樓君

川・協の仕事はエスカレーターのやうに捗みなく前進を續けて居るので御安心の上、氣長がに御支援願ひたい。大分基礎工事がすすんで來たのも柳界の將來を深思されてゐる諸君の御後援の賜だと感激してゐる。 川柳人協會

★川柳講座生る

▼本會名譽會員前田雀郎氏鑑修の下に眞に正しく川柳を知らうとする人々へ先づ基礎的知識をといふ建前で編纂された川柳講座第一卷が世に出た。本講座が初心者は云ふまでもなく既に柳界にある人々にとつても血となり肉となる必讀書であることは左の第一卷目次內容に見ても明らかであらう。

川柳評萬句合(水木眞弓)、俳句と川柳(宮田戊子)、武玉川の研究(一)(川村花菱)、古川柳名句評釋(一)(篠原春雨)川柳と自然(神尾三休)、川柳常套語の研究(一)(麻生路郎)、連句の研究と作法(一)(江副浦郎)現代作家論(一)(品川陣居)。なほ課外として川柳人國記(一)北海道(村井潮三郎)青森(後藤蝶五郎)宮城(濱夢助)秋田(村山夕帆)山形(野呂月華子)長野(金井有爲郎)

本講座は川柳文學學問化に一線を劃したものであるから川柳に關心を持つ人々は擧つて一讀され、鑑修者前田雀郎氏の並々ならぬ苦心に酬ひられたい

購讀希望者は東京市京橋區銀座西五ノ三(ヒツジ屋階上)川柳講座刊行會宛申込まれたい。同刊行會の會費は講座一卷●雜誌せんりう一ケ月金壹圓送料共、六ケ月金五圓五十錢。因に川協會員に限り特に一割引の特典を附與せられてゐるので多數の申込みをお勸めする。

▼川柳飜譯研究會では九月初旬に、その機關誌「S●H●K」を刊行し斯道の發展を期するとのこと。

▼川●雜名古屋支部では月並例會日を毎月一日に改めた。

▲柳樽寺川柳會では第二回「劍花坊賞」の發表をした。〆切は十二年十二月末

の義達とこれまた同じ傾向であるのも面白い。名譽職としては昭和十二年度陪審員。川柳關係では川柳雜誌社不朽洞會員川柳雜誌社御池橋支部同人、川柳人協會評議員。

（七）小西落丁君

東京の三越には「富士」、大阪の三越には「天主閣」といふ柳誌が刊行されてゐる程に百貨店と川柳とは關係が深い。川柳は人情の機微に觸るるもの、デパートに勤務する人々が特に川柳に關心を持たれるのも故なきではない。小西落丁君も又デパートマンの一人として川柳を愛好、空栗君の指導をうけて作句しはじめたのが昭和九年六月、今では「天主閣」の編輯に懸命の努力をそゝぎ「天主閣」に落丁ありの名をほしいまゝにしてゐる。

弔電と云ふに字數を減す工夫
父さんの脚を柱にしてあまへ

日、投票所は東京市中野區大和町二八一柳樽寺川柳會、受賞者の發表は「川柳人」來春二月號誌上。詳細は同會へ問合はされたい。

角戀坊逝く

▼昨秋以來、東都柳界の巨星頻りに墜ち我等の心膽を寒からしめてゐたが又々明治、大正、昭和の重鎭高木角戀坊翁が去る八月六日神田杏雲堂病院に於て長逝されたことは痛惜に堪えない。

翁は明治九年七月三日淺草區阿部川町に產れ、都新聞記者生活を振り出しに日本、中央、國民等を經て明治四十年酒醬油世界社を起し釀造界の刷新發達に貢獻されたが川柳家としては故近藤飴ン坊と共に柳樽寺の双璧と稱へられてゐた。讀賣、國民等の新聞柳壇選者として盡瘁されたことは人の既に知るところである。又川柳の改稱を主張し自らはこれを草詩と唱へ草詩堂を興し、川柳の詩的向上に志したが遂に大勢を動かすに至らずして已んだとは云へ、その主張に忠實であつたことは翁の高潔なる品格に俟つものが多いことを思はせられる。

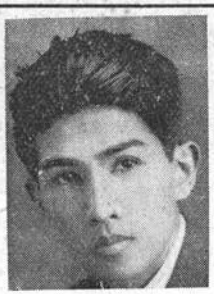
辭世

いづれ散る花なり芥子の
ほろ〳〵と

▼前號で本會の役員は詮衡を急がない旨を發表したが、詮衡を中止してゐるのではなく愼重に詮衡を續けてゐる意味に外ならぬので誤解なきやうに、既に全國各地で多數評議員理事を御快諾

がその句風。二句目の輕妙さは新進の雄たるを知る。本名は政三、本年四十歳の働き盛りで、六人の子福者、京都府宮津町の產。三越大阪支店受渡部主任としての激職にあつて常に川柳に餘力を放つところ敬服に値する。現住は布施市、趣味は登山とハイキング。天主閣同人、川柳人協會正會員。

(八) 弘津慶一君



川柳熱の張り切つた弘津慶一君は川柳家としては珍らしい釜山生れで、しかも大正つ子である。本名は慶生（よしを）別號を骨人（こつじん）といふ。君は昭和八年十一月から、川柳を作りはじめた。

返答無用　腕力で解決し
生きるのだそうだ力强く腕を見る

などがその代表作であらう。君は全北金堤の專賣局販賣所に勤務、獨身の自由さは川柳以外に弓道、讀書、野球にその熱をわかつてゐる。川柳人協會正會員。

下さつた方々があるのであるから御諒承願ひたい。何れ機を見て一括發表を見ることとなりますが、それまでは柳人素描欄に於て發表するに止める。役員諸氏もこの點お含みありたい。

▼本會名譽會員岡田三面子博士が物故され缺員のまゝになつてゐたので今回研究考證の權威梅本秋農屋君に本會名譽會員を推薦しその快諾を得たので御報告申上げる。

▲「柳人素描」は川・協名譽會員に限らず理事、評議員、正會員に至るまで全部掲載の豫定である。自他の事に限らず、よき材料をお持合はせの方は內報を乞ふ。

▲川・協入會申込書のついた入會案內が出來てゐるので御希望の方は申越されたい。

申込所　大阪市西成區玉出本通三の三六

川柳人協會

殘暑御伺
藤本福造
京都市姉小路鉄屋町東入

殘暑御伺
森東魚
豊中市櫻塚一一〇六

殘暑御伺
麻生路郎

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十四卷 第十一號課題

九月十日締切

（十句以內）

汽車　福田山雨樓　選

恩給　酒井大樓　選

第十四卷第十二號課題

十月十日締切

（十句以內）

工事　森東魚　選

支店　村松夢裡　選

毎號募集

近作柳樽（雜吟廿句）麻生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます。但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年八月廿五日印刷

昭和十二年九月一日發行

第十四卷　第九號

（毎月一回一日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所　川柳雜誌社

電話天下茶屋二五七九番

振替大阪七五〇五〇番

支社　東京市蒲田町女塚町二〇三

川柳雜誌社東京支社

禁無斷轉載

廣告料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

賣捌書店

（大阪）大賣捌大賣書店　參文社　明文堂　朝日ビル書店

其他　市內各書店（東ヶ）東京堂　巖松堂　吉岡書店

玉森堂　紀伊國屋　三昧堂（神戸）　米田賣文館（國館）

石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十二年八月二十五日發行（毎月一回一日發行）
新本　昭和十二年九月一日發行

川柳雜誌（第一六四號）

定價金參拾錢
送料壹錢

にきびとり

美顔水

▲ニキビ吹出物に第一等の良藥！

ニキビ吹出物にこれ程よく効く藥はないといはれ、種々な藥や方法で失望された方でもこの藥の効能には滿足されます。

▲美容藥として

この藥は美容藥としても非常に優れた効果がきり男子方にも婦人方にも廣く賞用せられてゐます。